

内蒙古「岱海」での発掘調査

— 平成7年度国際学術研究報告 —

秋 山 進 午

第1部 予備調査

1. はじめに

「内蒙古長城地帯」。いま広く使われているこの用語が、1935年（昭10）に刊行された江上波夫・水野清一両先生による『内蒙古長城地帯¹⁾』の標題からきていることは、およそ東北アジア考古学に関心を持つものにとっては、自明のことである。

この報告書は江上・水野両先生が1930年（昭5）、当時、その地へ至ることが誠に困難であったオルドス地方（当時の綏遠省）奥深くへの踏査成果であるが、かなり長期にわたって両先生の消息が判明しなかったこともあって、一時は遭難説も出るほど危険に満ちた考古調査であった。

そうした中であるにもかかわらず、三部に分かれた報告書の内容は極めて水準の高いものであって、今日においてもそれを凌駕するものはなく、この地域を研究する上でいまなお基本的文献たる地位を失っていない。

その報告書が刊行されたとき、水野先生も同人であった東京考古学会は、その会誌の『考古学』6—6（1935年10月）において「『内蒙古長城地帯』誌上出版祝賀会」の記事を掲載し、末永雅雄・三上次男・八幡一郎諸氏が祝賀の書評を行っておられるが、森本六爾氏はそのなかで「世に問ふ書物に適当な標題を與へることは、著者の才能でございましょう。「内蒙古長城地帯」の著者たちは、内容への魅力あるこの標題によって、その豊かな才能を発揮されました。〈中略〉一つの書の標題が其の書と一見無関係でありながら重要なことは、人と其の名前との関係に似ていると申しますが、今度の場合などにもよくあてはまる様でございませう。「内蒙古長城地帯」といふ魅力ある標題の成功はこの書に内容以外の内容を與へたと申さねばならぬでせう。」と喝破しているのはさすがである。

平成7年度（1995）文部省科学研究費補助金（国際学術研究）の経費助成を得た“遊

牧騎馬民族文化の生成と発展過程の考古学的研究”(課題番号:07041028)において、我々が踏査したところも、まさしく内蒙古の長城線に沿ってであった。

そして、その長城線の一角に位置する「岱海」の名をもつ、東西40km、南北20kmの湖こそが、中国内蒙古文物考古研究所と我々との国際共同研究“中日岱海地区考古調査隊”の考古発掘の舞台となったのである。

2. 国際共同研究の開始まで

筆者が“遼寧式銅剣”の論考を発表したのは1968-69年のことである²⁾。その中で北方民族の主要な武器である短剣について分析を行い、剣身、剣柄、剣把頭を別々に鑄造して組み合わせる別鑄式の遼寧式短剣と、全体を一時に鑄造する一鑄式のオルドス式剣とに二区分し、前者を東胡の剣、後者を匈奴の剣に比定しうると考えた。所属の民族については異論があるとしても、筆者による剣制のこの二区分については、いまま踏襲されているところである。

東胡に続き筆者が匈奴研究を発表したのは1980年のこと³⁾で、その間10年余の空白がある。

田広金氏によって「桃紅巴拉の匈奴墓葬」が発表され⁴⁾、初めて信頼し得る考古資料に接することが出来たのはようやく1976年の『考古学報』誌上である。そして、それ以降は、准格爾旗玉隆太、烏拉特中后連合旗呼魯斯太、准格爾旗西溝畔、杭錦旗阿魯柴登と堰を切ったように重要発見が報告され、当時最新のそれら資料に、以前の准格爾旗速機溝と大青山下発見青銅器資料を加え⁵⁾、ようやく筆者の先の匈奴研究論考となったのである。

その間に、内蒙古の匈奴研究をリードする研究者として、田広金氏の名前がしっかりと筆者の脳裏に刻み込まれていったのであるが、それを決定的としたのは郭素新夫人との共同編著になる『鄂爾多斯式青銅器』の発表である⁶⁾。

上編として田・郭夫妻の「鄂爾多斯式青銅器研究」、下編に新発表の「毛慶溝墓地」報告ほか既発表の諸遺跡の報告をまとめた400頁近い大著である。豊富なカラー・白黒図版と遺物の実測図が多数収録されており、オルドス青銅器研究の新たな必読書となった。

とはいえ、該書にも問題はある。上編の「鄂爾多斯式青銅器研究」はオルドス青銅器を兵器と工具、装飾品、生活用具、車馬具に分けて詳しく考察しているが、使われた資料の大半が採集資料である。従って、先ずそれら資料の真偽を弁別することから再検討を行う必要がある。

今回の国際共同研究の一つの目的が、まさにその点にある。そのためには、内蒙古のみならず、長城線に沿って北京市から寧夏回族自治区に至る間に、近年新たに発掘され

た北方民族資料の実地踏査がぜひとも必要なのである。

該書の入手のころ、筆者の主な関心はまだ遼寧式銅剣に向かっていた。文革後、再刊された『考古学報』には内蒙古寧城県南山根遺跡、内蒙古赤峰夏家店遺跡、遼寧省瀋陽市鄭家窪子遺跡、内蒙古赤峰蜘蛛山遺跡など、筆者の先の遼寧式銅剣論考にかかわる重要遺跡の報告があいつぎ⁷⁾、さらに、筆者の論考に対する本格的反論として林漢氏の論考⁸⁾、靳楓毅氏の論考⁹⁾が発表され、そうした新資料の調査研究が当面の課題となっていたからである。

筆者のそうした願望が実現の方向に向かったのは1988年5月、遼寧省人民対外友好協会の招待によって、三宅俊成・俊彦両氏と共に、初めて遼寧省を訪問してからである。その訪問を契機として、その後、我々と遼寧省文物考古研究所との国際共同研究が実施されることとなったのであるが、その経過については既に報告書等に詳しく記したので再述しない¹⁰⁾。そうした中国訪問を繰り返す中で、当時、内蒙古文物考古研究所長であった田広金氏とも面識を得た。

さらに、遼寧省における共同研究のさなかに、郭大順・孫守道先生から、当時、我々の主たる研究対象であった夏家店下層文化の石城遺跡や、発見されたばかりの興隆窪文化の遺跡・遺物についての、内蒙古における最新の情報をたびたび聞く機会があり、我々はまだ見ぬ内蒙古の遺跡に、強い憧れを持つようになっていた。そんな時、1991年の第2回の共同研究の途次に行った山東省考察旅行の際、済南の宿舎で田広金・郭素新ご夫妻と懇談の機会があり、遼寧省との共同研究が完了したあと、内蒙古との国際共同研究を強く慫慂されたのである。

3. 第1次内蒙古予備調査—1993年（平成5）秋—

1990年から93年春までの、3年間にわたる遼寧省との国際共同研究が無事完了したあと、我々はその報告書の作成を急ぎ進めるかたはら、次なる飛躍を求めて、中国での新たな共同研究の方向を模索し始めていた。一つは内蒙古であり、もう一つは河北省である。1993年9月、共同研究の可能性を調査するため、筆者は宮本一夫氏の同行を得て、内蒙古と河北省の考古学事情の調査旅行に赴いた。この旅行には、幸い、メトロポリタン美術財団の資金援助を受けることが出来た。それには、本学の武田恒夫教授のご高配を頂いたことを銘記して厚く御礼申し上げる。

実はこの年の夏、内蒙古文物考古研究所の主催で国際共同研究がフホト市において開催され¹¹⁾、我々も参加を慫慂されていたが、時間的な都合が悪く、秋になって我々のみで内蒙古を訪問することとなったのである。

筆者と宮本氏は9月2日(木)、11時前、伊丹空港から北京へ向けて旅立った。中国で

の学会に参加される小南一郎氏と北京まで一緒である。13時13分北京首都空港着陸、市内で休憩、夕食の後、再び首都空港へ引き返し、国内線のフホト行にのる。20時34分離陸、夜の闇の中を西へ。21時24分、真っ暗なフホト空港に降り立つ。空港には田・郭夫妻の外、内蒙古文物考古研究所の劉来学副所長らが出迎えて下さる。考古所の北京ジープで宿舎の内蒙古賓館へ。田・郭夫妻の長男で、やはり考古研究所で働く田文涛君がいろいろ世話を焼いてくれることとなる。簡単な打合わせの後、就寝。

9月3日（金）快晴—内蒙古考古研究所—

朝食のあと、借り上げてくれたタクシーで考古研究所へ。応接室で早速、毛慶溝オルドス青銅器遺跡出土の遺物を調査。出土遺物は墓毎にA4サイズほどの箱に入れ、ガラスの蓋が被さっている。取り出して自由に調べてよい、と誠におおらかである。もっとも今回はあくまで予備調査であるから、詳しく調べるには時間がない。一通りを大急ぎでノートし、土器の一部分のみ、資料写真を撮らしていただくにとどめた。

いったん宿舎へ帰り昼食休憩のあと、再び考古研究所へ。今度は朱開溝遺跡の遺物の一部を調査した。朱開溝遺跡¹²⁾は田・郭夫妻が調査担当者として発掘調査された遺跡である。内蒙古の最南部、オルドス高原にあり、南へ20kmほどで陝西省となる。黄河の河曲は東80kmほど。関中の農耕文化が北方へ伝播した地である。住居址と墓地が発掘され、龍山文化後期（関中の客省庄2期に同じ）から二里头文化期、商（殷）前期にかけて、五期の文化層が検出されている。とりわけ、商前期の墓からは戈・刀子・短剣などの青銅器¹³⁾が出土し、オルドス青銅器の起源を考える上で重要な資料となっている。

我々は1040号墓出土の青銅戈・刀子・短剣などを実見した。それらはいずれも赤銅色をしており、地方作のように思えた。この遺跡からは、採集品ではあるが、石製の青銅鍛鑄型が出土しており、この地での青銅器製作工房の存在が確実である。すでに報告されているもののほか、その後の調査で出土した青銅製品も見ることが出来た。その中には、釜（兜）と報告された、はたて貝形の青銅器もあった。

夕方近く、郭治中氏が来られた。氏は内蒙古東部、白音長汗遺跡の発掘担当者である。最近、調査現場から戻ったばかり、ということで、遺跡の最新情報をうかがうことが出来た。

白音長汗遺跡¹⁴⁾は内蒙古の東南部シラムレン河北岸の林西県白音長汗にある、興隆窪文化期の遺跡である。先に発表された概報では、環濠を巡らせた住居群が報告されていたが、その後の調査で、その西に同規模の環濠集落がもう一つ発見された。また、斜面の頂上に積石墓群が存在することも判明した。その後、収蔵庫へ案内いただき、土器資料を前に、白音長汗遺跡の特色を説明いただいた。興隆窪文化については、早くに論じたことがあり¹⁵⁾、また、1994年の内蒙古第2次予備調査の際に現地を訪れることが出来たの

で、詳細はそこで述べることにしたい。

夜は内蒙古文物考古研究所が、現在の新城区へ移転するまで使用していた將軍陣屋の食堂で内蒙古文化庁副庁長趙芳志女史を中心に、蘇俊・劉来学氏ら内蒙古文物考古行政の指導幹部諸氏と会食した。蒙古族女性の歓迎の歌とともに、大杯ですすめられる60度近いアルコール度の白酒の洗礼を早くも受けることとなった。

9月4日（土）快晴—老虎山へ—

8時30分、タクシーで出発。車はチェッコ製のラダという小型車である。フホホトの市街を抜けて、真南にホリンゴールを目指し、オールドス平原を走る。フホホトからホリンゴールまで国道209号線で49kmと表示されている。前方にかすかに山影が見えだしたころ、9時20分ホリンゴールへ入る手前、フホホトから38km地点で、右手に城壁が見える。北魏の最初の都の盛樂城址である。¹⁶⁾内城と外城に分かれ、延々と城壁が続く。城壁の一端から城内を眺め下ろしただけで9時40分再び出発。9時50分ホリンゴール市内を東に折れ、山道に入る。舗装が途切れ、狭い地道でカーブがふえる。10時15分、分かれ道。右へゆくと内蒙古から山西省右玉県へ至る。省の境は長城線上の殺虎口で、古来、北方諸民族が中原へ攻め込む時、必ず通過した通路である。見事な壁画で著名な、和林格爾漢墓はこの道路沿いにある。¹⁷⁾

我々は左の和左公路を進む。峠の上り下りを少なくとも3度繰り返す、11時涼城県に入る。やがて永興の部落を過ぎ、11時14分、左へ側道にはいる。ここまでホリンゴールから51km。正面に蛮汗山脈が立ちはだかる。

我々が目指す内蒙古文物考古研究所の工作站はその一角、老虎山の中腹にある。正式名称ではないが、老虎山荘とあだ名される。のぼる道は険しく、渡る小川には橋がない。石垣の土台に塀を巡らした老虎山荘が、はっきり望める高さまで来て一旦車を下りる。左手に老虎山石城遺跡が見られる。目をこらすと、一角に、山の中腹から連なる石城壁の白い線がはっきりと見える。我々が先年測量調査を実施した、夏家店下層文化の石城址より更に古い、龍山文化期の石城址なのである。¹⁸⁾是非みたい、と思いつけていた遺跡を目の前にして興奮気味に11時35分、山荘に到着した。

この山荘は1984年設立で、その後徐々に拡充され、現在のように五棟の建物がコの字形に立ち並ぶようになったとのことである。机と寝台を入れた居室のほか、食堂と収蔵庫があり、昼食後早速収蔵庫を見学する。収蔵庫は3室あり、三段棚に、復元した土器や石器がぎっしり詰まっていた、先ずその量に圧倒された。今回主に見学したのは、この山荘を拠点として行われた各種の遺跡の出土遺物のうち、山荘のすぐ西の老虎山遺跡のほか、西白玉・板城・園子溝の龍山文化を中心とした遺跡の出土品で、ほとんどが略報告に留まっているものばかりである。¹⁹⁾

小休止の後、待望の老虎山遺跡の見学に向かった。1991年、山東省済南市で開催された“城子崖遺跡発掘60周年記念考古学会”の席上で、田広金氏が公表されて以来、注目していた遺跡である。²⁰⁾

我々は遼寧省との共同研究の際、またその間1991年に日本学術振興会の資金援助を受けて行った内蒙古東部の考古調査において、数多くの石城址を見学したが、それらはすべて青銅器時代初期の夏家店下層文化期のものであった。それに比べ、この老虎山遺跡の石城壁は新石器時代の龍山文化期のものである。年代的にはこちらの方がより古い。

後方にそびえる老虎山から南へ派生した尾根の一つが、一旦平坦になるところを頂上とし、斜面の両側に石塊を積んで城壁としている。住居址は城壁の中に斜面に沿って何段かに並んでいる。石壁の頂上には方形の石組があり、田氏は祭祀遺跡ではないかといわれる。城壁の西南角には2基の窯があり、うち1基はなかなか残りが良い。

遺跡の南外に方形に掘り込んだところがある。なんと、そこは今の老虎山荘を作る以前、発掘調査の際に寝泊まりした窯洞の址だそうである。田・郭夫妻それに二人のお子さんがここに住んで発掘に明け暮れたとのことで、日本の発掘状況と比べ、その困難さに思いを致さざるを得なかった。

一旦山荘へ帰り休憩の後、18時20分、車でフホトへ帰ることとなる。山荘は蛮汗山の中腹にあり、広々とした眺めである。オルドス青銅器を多数出土した毛慶溝遺跡は東の方に望めるが、徒歩で片道1時間はかかるとのことである。その他の岱海周辺遺跡は途中の山に遮られ、はるかの彼方で、あらためて中国の土地の広さを知らされる。またの来訪を期しながら夕闇の中を引き返し、21時に田氏宅へ到着。発掘調査のビデオを見ている内に、渤海の海老の天麩羅や羊・海老入りの餃子などの御馳走が並ぶ。食事に懇談に楽しい時を過ごし22時40分辞去。23時前宿舎へ帰る。

9月5日(日) 快晴—オルドス高原へ—

8時10分宿舎発、郭素新さんと研究所の馮氏が同行して下さる。フホトを出て車は西に向かう。右手、つまり北側に大青山山脈がちょうど屏風を連ねたように延々と壁を造る。この大青山はその西の陰山山脈と連なって、蒙古平原と蒙古草原、すなわち、農耕文化圏と遊牧文化圏とを、区切る役割を果たしてきた。漢族、つまり農耕民の力の強いとき、たとえば秦代では、農耕民側はこの山脈を越えて北に進出し、草原の唯中に長城を築いた。それとは逆に、遊牧民の力が強いとき、たとえば、匈奴の力が強勢であったときは、この蒙古平原一帯は匈奴の支配のもとにあった。秦漢時代に陰山山脈の北に築かれた長城は、農耕民がもっとも北に進出した証拠である。一方、その後の時代の長城は、多く、現在の内蒙古と山西省を区切る山岳地帯を西に走り、有名な黄河の河曲を越えたあたりから南に下がり、オルドス高原の南端の、今の内蒙古と陝西省との境を

通り、寧夏回族自治区の首都の銀川へと連なる。この辺りでは、秦漢の長城と明代の長城との位置が最も遠く離れるが、そのことは、当然、この陰山山脈から南の、オルドス平原からオルドス高原へかけての広大な地域が、農耕民と遊牧民の、いかに激しい角逐の場所であったかを示すものといえよう。

10時40分、包頭の旧城を過ぎ、新市街にいたる手前で左、つまり南に折れる。やがて、黄河を渡る橋にかかる。有料橋であるが、以前のように、渡し船に乗り換えるのに比べると、どれだけ便利になったことか。滔々たる黄色の奔流を眺めながら対岸に渡り、いよいよオルドス高原へ向かう。西から流れてきた黄河は、寧夏の青銅峽を過ぎたところから北へ角度を変え、やがて内蒙古へ入り、オルドス平原を潤し、陰山・大青山の南を東流し、再び大きく方向を変えて南に向かい、山西省と陝西省の境をなし、三門峽の難所から今度は東へ向きを変え、河北平原に流れだす。オルドス高原はこの黄河の屈曲に西、北、東を区切られた地域で、古来、遊牧民の活動の舞台である。現在は全域が伊克昭盟として、内蒙古自治区の一部である。

黄河の潤す平野部を過ぎて、高原への登りになった辺りから、道路の左右に一面に砂漠が広がる。オルドス高原の北部に広がる庫布齊砂漠である。道路のすぐ左右は植樹などで幾分緑がかっているが、彼方には砂の山が延々と連なるのが望まれる。初めて目にする砂漠の光景にみとれてしまった。

砂漠地帯を過ぎ、高原に出る。平らではなく、結構険しい地形である。目的の伊克昭盟の中心の東勝市には12時50分到着。フホトから約150km。宿舎は中国人民建設銀行の招待所。オルドス博物館の王志浩副館長が出迎え、世話を引き受けてくださる。博物館の物館長を交え昼食のあと、やはりここまで来たからには、ジンギスカン陵までゆこうとさらに南を目指す。14時出発、約50km走り15時到着。蒙古族の英雄中の英雄ジンギスカンを祭った成陵は、相当の人出でにぎわい、様々な施設が設けてある。何はともあれ陵にもうでる。横に長い長方形で、中央と左右に半球形の屋根をかけ、屋根には錨の形が描いてある。なるほど、フホト市内で時々建物の上にあって、妙な装飾だと思っていたのは、このジンギスカン廟の屋根の模倣であったのか。内部にはジンギスカンの肖像の他、その生涯の絵物語りなどが飾られていた。もちろん、現在の廟は当初のものではない。何度も移動した揚げ句、現政権になっての建物である。したがって古いものは何もないが、蒙古族の誇りを満足させるためには役立っているはずである。

もう帰ろうとしているとき、管理事務所へ案内され、そこで、蒙古族伝統の客人接待を受けた。美しい蒙古族伝統の衣装をまとった女性があらわれ、蒙古族の客人歓迎の歌をじょうじょうと歌い、そのあと、銀の大ぶりの盃になみなみと注いだ白酒を差し出す。これは客人として必ず飲み干さねば、大変な失礼にあたるそうである。親指と薬指を合わせ、酒に浸して先ず天に、次いで地に、最後に自分の額に注ぎ、それから盃を飲み干

すのが定めであるが、なみなみと注がれた、60度近い度数の高い盃を干すのは容易ではない。まことに手荒い歓迎である。結局、私が2杯、宮本氏が1杯、辛うじて干して、ほうほうの体で車に乗り込んだ。帰り道、伊金霍洛旗の郡王府が博物館になっているということで立ち寄ったが、18時過ぎと遅く、中に入れなかった。19時宿舎着。

9月6日(月)曇—オールドス博物館—

オールドス高原は海拔1500m平均で、曇ると肌寒い。8時宿舎発、オールドス博物館へ見学に向かう。この博物館は1989年の開館で、まだあまり知られていない。日本人考古研究者が訪れたのは、我々がはじめてではなかろうか。伊克昭盟政区、すなわち、オールドス高原の中央博物館として建設されたもので、オールドス高原の自然の成り立ちからはじまって、古人類の生活から、各時代の出土資料を主に、現代に至るまで、それに民族資料を展示している。我々は新石器時代から隋唐に至るまでの興味有る資料を写真にとった。この伊克昭盟内には杭錦旗の桃紅巴拉、准格爾旗の速機溝などオールドス高原の匈奴遺跡が多数報告されているが、そうした主要なものを別として、他にもいろいろ興味深い資料が並べられていた。またの再訪を期しつつ半日の見学を終えた。帰りに、王志浩さんから『鄂爾多斯文物考古文集』を頂いたが、そこには、展示資料の報告が集めてあり、大いに参考となる。

宿舎で昼食のあと、オールドス高原の最高のおみやげとして、カシミヤ工場の売店で鄂爾多斯印のセーターを買込んで13時30分東勝市を出発、往路をたどってフホホトの宿舎へ帰る。

9月7日(火)快晴—フホホト滞在—

8時40分宿舎発、9時内蒙古博物館へ。博物館に保管されているオールドス高原出土の純金器物を特に数点出していただく。西溝畔出土の羊頭飾帯金具はずっしりと重い。調査中に宮本氏が西溝畔出土の帯金具の裏面に彫り込まれた漢字銘文の位置が『鄂爾多斯式青銅器』報告の図と異なることに気が付いた。これらの純金器物もいずれ詳しく再調査したいものである。あと、11時30分まで急いで博物館の陳列を一巡する。

昼食は田さん一家とともにする。その後、1時間ほど休憩の後、内蒙古文物考古研究所との共同研究についての申し合せ書原稿を作成する。その後、その内容について田、郭夫妻と協議する。一応合意した原稿は早速、中国文に翻訳を依頼する。

9月8日(水)快晴—フホホト滞在—

午前は考古研究所において共同研究の可能性についての話し合い続行。この席で、遼寧省との考古測量を中心とした共同研究より、より一歩進め、共同発掘調査を提案する。

今後、我々が作成した内容で連絡を密にし、どこでどのような内容の調査を行うかを引き続き協議してゆくこととなった。

その後、郭素新さんの部屋で岱海周辺遺跡の話聞き、仰韶文化後期の王墓山遺跡と龍山文化の園子溝遺跡の窯洞式住居の発掘写真を一部頂く。前者は田さんたちが発掘の意欲を燃やしている遺跡で、北京大学の嚴文明先生も興味を示されていた。後者は窯洞の内部を厚く石灰で塗り固めている。まだ見ぬ岱海周辺には、興味深い遺跡群が取り巻いていることを確認できた。

午後には、研究所の会議室で、内蒙古文物考古研究所諸氏と座談会を行う。すでに退職されているが、内蒙古の考古学者として著名な李逸友先生も出席いただき、まことに光栄である。ほかに副所長の魏堅氏、田、郭夫妻、第一研究室主任の郭治中氏ほか内蒙古の考古研究の主だった方々との懇談で、先ず、我々のもっとも関心のある龍山文化期の石城と夏家店下層文化の石城との問題から始まり、話題は新石器時代から青銅器時代まで各方面に及び、教えられるところが多かった。

9月9日(木) 晴—北京へ—

5時起床、5時40分宿舍発、飛行場へ。劉来学・魏堅両副所長、郭素新さん、馮さんらが早朝にかかわらず見送って下さる。6時50分離陸、7時43分北京空港着、内蒙古のはじめての旅は無事終了した。私と宮本氏はこのあと、河北省に鄭紹宗先生を尋ね、河北省との共同研究の可能性を調査したが、その報告は別稿にゆずりたい。

4. 第2次内蒙古予備調査—1994年(平成6)秋—

我々は内蒙古との共同研究をより一層進めようと、1994年秋、第2次の予備調査を計画した。前回の第1次調査では、内蒙古とともに、河北省との共同研究の可能性も含めた調査であったため、調査日数が少なく、肝心の現地調査に充分の日程がとれなかった。つまり、中国の広さがなかなか実感できず、地図の上ではすぐそばにある遺跡でさえも、間に深い溝があれば、簡単には行けない。道路舗装が充分でなく、距離のわりに時間がかかることなどである。すでに、遼寧省における調査経験で、ある程度は予想していたことではあるが、内蒙古には内蒙古の実情がある。前年の予備調査をもとに、次の共同研究の相手を内蒙古と定め、今回はより綿密な予備調査を行い、共同研究による発掘調査地点を決定したいものと考え、再度の調査旅行を計画した。同行は東大の大貫静夫氏と九州大の宮本一夫氏。

1994年9月29日(木) —出発前日—

大型台風の影響への襲来が予想され、交通の混乱を避けるため、当初予定より早く家をでた。幸い直撃は免れ、雨もよいの中、ホテル南海にて宮本氏と落ち合う。大貫氏は成田から出発し、北京空港で合流する手はずとした。今回は研究費の補助がなく、皆、私費での旅行である。

9月30日(金) 曇後晴—北京へ—

台風の影響か、9時30分ごろ出国ロビーに入るが出発が遅れる。まだ新しい関西国際空港のはじめての利用である。11時30分ようやく離陸。15時30分北京空港の出口で大貫さんと合流する。早速琉璃廠で本を買込み、4包み発送依頼。宿舎は天橋賓館のシングルルーム。

10月1日(土) 快晴—北京から内蒙古へ—

9時にホテルを出て、先ず国家文物局へ行くが、知り合いはだれもない。続いていた考古研究所もだれもない。国慶節だから当たり前である。タクシーで北京大へ向かう。10時30分着、勺園に東大から留学している吉開君の部屋を訪ねる。その後、三宅・江・小林君らの留学生と、集まっていた北京大考古学の蘇哲・趙輝・趙化成氏らと昼食を共にしながら楽しいときを過ごした。

2時から北京大にこの春、新しく開設されたサックラー博物館に李伯謙先生をお訪ねして懇談し、そのあと、陳列室を案内していただく。この博物館の建物は、アメリカの富豪で中国美術のコレクターであったサックラー氏の寄付になり、展示資料は長年にわたる北京大考古学研究室の発掘調査や、研究活動により収集されたものを基本に、一部、北京大卒業生が各地の調査研究機関において発掘した資料をあつめてある。それだけに、名品は多くないが、いずれも、出土地の明確な、資料価値が高いものばかりで、研究にはもってこいである。それに、自由に写真をとらせていただけるのも有り難い。17時の閉館までたっぷり見学したが、それでも最後は駆け足となった。

大学からタクシーでホテルへ向かったが、国慶節の行事のため車が旧市内に入らず、永安門から歩く。ホテルで夕食のあと、首都空港へ向かい、フホト行の国内線CA-1102便に乗る。21時58分離陸、22時50分着陸、気温8度、風が冷たい。空港に劉来学副所長、郭素新さん、郭治中氏らが出迎えて下さる。宿舎の雲中賓館に向かい23時30分就寝。

10月2日(日) 晴、風寒し—老虎山へ—

9時35分宿舎発、昨年と同様、真南に道をとる。10時14分北魏の盛樂城に立つ。ホリソールから東に折れ、山あいの道を進む。12時40分再び老虎山荘につく。先着の田先

生が出迎えて下さる。午後はこの山荘にはじめて訪れた大貫さんと、もう一度老虎山遺跡参観。

10月3日(月) 晴—岱海へ—

8時、朝食のあと、田先生から岱海周辺遺跡の概要をまずうかがう。9時40分山荘発、永興と涼城の間の峠から前方遠くに青い水が望める。目指す岱海である。10時10分涼城県の十字路を右折、岱海の西をとおり和左公路をゆく。そのまますすぐすすむと、山西省の左雲に至る道路である。我々の車は10時23分六蘇木から左へ、岱海の南岸の六泉路を進む。右手に連なる山の頂きに、長城の烽火台が次々あらわれる。ここは明代の旧長城が連なる長城地帯なのである。11時5分王墓山遺跡着。山荘からここまで約60km。

王墓山遺跡は岱海南岸のほぼ中央にあり、背後の山の名から名付けられた。王墓山から派生する尾根の一つが丘状に盛り上がり、ゆるやかに南の歩量河に向かって下る斜面に、下から上へ王墓山下・王墓山中・王墓山上と三つの遺跡が順に営まれている。年代は仰韶文化の中期から晩期へかけてである。すでにそれぞれの遺跡で試掘が行われ、下遺跡では住居址が6基、灰坑1個が、上遺跡では住居址1基と灰坑2個が発掘されている。また、中遺跡では環濠が一部発掘されていた。

王墓山から今度はさらに小高い石虎山に向かう。昨年、ボーリング調査で環濠が発見されたばかり。また、散布の土器は後崗一期文化で、東にある紅台坡遺跡とならんで仰韶文化前期に遡る。この岱海周辺ではもっとも早い農耕文化遺跡である。環濠のほかは住居址の状況が明確でないのが欠点である。紅台坡はさらに残りが悪いとのことで、ならば、既に中国側が試掘している王墓山よりも、この石虎山が未開拓だけに是非発掘をやりたい。

13時30分まで現地見学に費やし、下山して14時麓の民家で昼食を頂く。王墓山調査の際にはいつも基地となったとのことで、我々も安心して世話になった。15時11分出発、途中涼城で買い物をすませ、17時山荘帰着、17時30分から19時の夕食まで収蔵庫を開けていただき、既に発掘されている遺物を調査する。収蔵庫は3か所あり、仰韶、龍山、その他にわかれる。なにしろ復元された土器だけでも200個近いであろう。石器、骨角器など実に沢山あって、何から調べて良いのか、まごまごするうち時間が立ってしまった。22時床につく。

10月4日(火) 快晴—岱海北岸へ—

朝食のあと、9時23分山荘発、今日は涼城をまっすぐ通過して、岱海の北岸を東へ走る。途中、公路から左折して園子溝遺跡²⁾へ向かう。山荘から約40km、10時40分着。岱海に面した山の斜面に掘り込まれた窯洞式の住居址群である。保存用の扉を開けて幾つか

代表的なものを見学する。龍山の住居址は白灰面が特色とは聞いていたが、この遺跡は壁も真っ白に塗られ、床は厚く、まっ平で、実に見事である。保存も良好で見ごたえがある。南北の2区にわかれ、何段か雛壇ふうに並び、総数100基近くあろう。今は岱海から6~700m離れているが、遺跡の前の岩に残された痕跡から、当時は岱海の水位が高く、この遺跡は湖岸に面していたとのことである。

12時45分見学を終え、更に北へ向かう。13時18分温泉着。岱海に面して温泉が湧き、入浴の他、療養所も設けられている。昼食のあと一風呂浴びる。今のところは中国人用のみであるが、新館を建てつつあるので、間に合えばここに宿泊し、丁度対岸の遺跡地点まで毎日船で往復する案があるとのこと。目の前の湖岸には遊泳場もあり、実現すればまことに結構な発掘となろう。16時22分温泉発、17時22分山荘着。今日も20時の食事まで、遺物調査。

10月5日(水) 快晴—フホトへ—

今日は山荘を離れる日。皆早起きして7時から8時の朝食まで遺物調査。9時5分出発、今度は一旦涼城方面に向かい、その手前から蛮汗山を横切って、東北からフホトへ向かう呼陽公路を走る。12時5分宿舎の雲中賓館着、山荘からの距離は130km。昼食、休憩のあと、市内を散策、古本屋や文物商店をぶらぶら歩くも、あまり収穫はなかった。

18時30分から劉・塔拉両副所長、文物処王副所長、馮さんそれに田先生夫妻など内蒙古考古幹部諸氏の歓迎宴に出席、暖かい歓迎に、つい強い白酒の盃を重ねすぎ、酩酊してしまう。

10月6日(木) 晴—内蒙古文物考古研究所—

昨夜、気炎をあげすぎた報いで、今朝はダウン。朝は粥一杯、昼は麵一杯でベッドに横たわったまま。15時ようやく起きだし、15時15分から考古研究所での会談に望む。それまで、大貫・宮本氏は内蒙古文物考古研究所設立40年を記念して、研究所建物の3階に設けられた特別陳列室を参観。未発表の重要遺跡からの遺物がずらりと揃っていた、とのことで、後悔先に立たず、みそこなってしまった。

会談は順調に進み、来年度、文部省の科学研究費補助金がつけば、石虎山遺跡を共同発掘することで意向書を作成することとなる。二度にわたる予備調査で、岱海周辺遺跡の様相をあらましつかむことが出来、内蒙古の考古事情も把握することが出来た。これで、準備は大方整った。あとは、経費が調達できるか否かである。この春、文部省に申請した国際学術研究の行方が気になるが、来年の査定発表を待つしかない。

18時30分から21時5分まで、会談に出席したメンバーを招いて共同研究合意の答礼宴

を催す。昨夜に懲り今夜はセーブし、無事フホトでの日程を終了する。

21時経費の支払いのときになって、大貫氏が現金の盗難に気が付く。トランクのなかにしまっていた弗札の、それも100弗紙幣だけを抜き取ってあったので、今まで気が付かなかった。中国人用のホテルではやはり危険である。来年からは考えねばならない。

10月7日（金）晴後曇—赤峰へ—

6時起床、7時出発、空港へ。劉所長らの見送りを受け、田先生夫妻、塔拉さん、郭治中さん同行で、8時20分赤峰行のCA-1139便にのり、赤峰を中心に、10月10日まで内蒙古東部の考察を行った。次いで11日に北京へ出、10月12日、国家文物局に文物処の王軍氏を訪ね、共同研究の理解を求めたあと、帰国したが、この紀行は、先の国際交流基金による、内蒙古東部調査と併せ、別稿としたい。

5. 第3次内蒙古予備調査—1995年（平成7）春—

平成7年3月、科学研究費補助金の国際学術研究採択の朗報が入る。早速、田さん宛連絡。国家文物局宛の発掘許可申請を作成する。

やがて、田さんから、発掘許可申請のためには、尚一層、詳しい協議書が必要との連絡が入り、3度目の予備調査を行うこととする。この機会に遼寧省の関係遺跡、遺物調査も併せ行うこととし、大貫氏と共に6月1日、関西空港から福岡空港を経由して、13時40分大連周水子空港着。あと、瀋陽新楽遺跡、阜新查海遺跡、朝陽牛河梁遺跡、錦州市博物館において遺跡遺物の調査研究を行い、6月8日朝、錦州からの列車で北京へ到着した。この踏査については別稿で取上げることにしたい。

6月8日（木）晴—フホトへ—

日中、大貫氏と私はそれぞれ、思い思いの日程のあと、フホトへ行くため北京空港へ。21時30分発のフホト行きが遅れ、あとの便が先にいってしまっても、まだ乗れない。さすがおとなしい中国人乗客たちも、ついにおこりだし、空港係員にくってかかるが、如何ともしがたい。カップラーメン1個と飲料水1瓶の配給があるだけで、4時間待たされる。日付けが変わって0時55分ようやく乗り込み、1時離陸、1時47分フホト着陸。こんな遅くにも塔拉副所長が出迎えて下さる。2時20分昨年と同じ雲中賓館に入り、文涛君らと打合せの上、ようやく就寝。

6月9日（金）晴—老虎山へ—

7時30分起床、8時30分朝食。9時35分宿舍発、私は三度老虎山へ向かう。ホリング

ール経由で12時老虎山山荘着、先着の田さんらに迎えられる。他に劉来学考古研究所副所長、蘇俊文物処処長も待ち受け、昼食は歓迎宴となる。酒豪の二人を相手にするのは大変だが、彼らは今日中にフホトへ帰る予定なので、危うく終了。

総勢で王墓山、石虎山の現地調査と、現地での発掘打合せを行う。そのあと、山荘で田さんと20時まで懇談。夕食には毛涼城県文化局長、王涼城県博物館長が同席し、またまた宴会。22時過ぎようやく就寝。

6月10日（土）快晴—岱海へ—

6時起床、8時30分出発、岱海へ。9時35分現地着、先ず石虎山へ登る。現地の試掘やその後のボーリング調査の状況を聞く。環濠は確かにあるが、住居址の方は不確かだとのこと。ついで、王墓山へ。ここでも、以前行われた試掘調査のあとを見、王墓山上遺跡から、同中、同下遺跡を詳しく見て回る。12時10分遺跡発、12時50分涼城県招待処着、昼食。岱海でとれる魚の煮物、焼き物、揚げ物がでる。今後のことを考えて、一番安全そうな揚げた魚が大好きで、あとは嫌いだといっておく。食後、涼城県博物館へ。涼城の町から左雲へ向かって、右手最初の井溝村にある。ここはもとのキリスト教会を改造した施設で、今も十字架が屋根に付けられている。入って左手は日中戦争の際、この教会が中共軍の指令部になったときの革命記念室。日本軍が一時、この辺りまで攻め込んできた時の残虐行為の展示がある。日中戦争の爪痕は、こんな奥地にも及んでいることに、肅然とさせられた。歴史展示は右手。この涼城県には岱海を中心に、その周辺に各時代の多数の遺跡が分布するが、そのうち、特にオルドス青銅器の遺跡を中心に展示されている。我々が見学中、皆は中庭の周りを取り囲んだ、平屋の建物を物色している。あとできくと、改造して我々の宿舎にしたいとのこと。ここへ見学にきたのはその目的もあったことがわかった。16時見学を終え、16時20分老虎山荘着。

6月11日（日）快晴—フホトへ—

6時起床、収蔵庫を見学する。8時30分朝食、9時～11時調査についての話し合い。中国側は我々が希望する石虎山より、王墓山上遺跡の調査を希望している。二度の現地調査を行い、中国側の意向もふまえ、そろそろ決断する時期となった。11時～12時30分今回最後の収蔵庫見学。12時40分～14時20分昼食。昼食といっても飲み助揃いだから、まあ宴会のようなものである。内蒙古での調査はよほど酒に強くないと勤まらない。14時30分山荘発、16時30分フホトの昭君大酒店着。去年の盗難事件にこり、高いが外人用のこのホテルを希望した。休憩の後18時から任弁公室主任を中心に、劉、蘇、田夫妻らが出席して宴会。

午前の話し合いのとき、国家文物局の認可には、文部省からの科学研究費補助金許可

書類が必要との指摘があり、宴会のあと、日本へ電話をかけたがうまく繋がらない。やっと FAX で必要書類を送ってもらったが、あとで電話 FAX 代1万円余を支払わせられた。

6月12日(月) 晴—内蒙古文物考古研究所—

7時30分起床、8時朝食、8時50分ホテル発考古研究所へ。9時30分～11時昨日二日酔いで、私だけ見学し損なった考古研究所3階の、特別陳列室を見学する。白音長汗遺跡からはじまり、最近の内蒙古における目覚ましい考古調査の成果が展示されている。ほとんどが未発表か簡報しか無いものばかり。写真は禁止なので、ノートに精を出す。一旦ホテルへ帰り、昼食、休憩のあと、14時30分から、考古研究所の会議室で会談。発掘協定書の作成を行う。発掘場所は石虎山ではなく、王墓山と決断する。なにしろ、中国での発掘調査ははじめてである。科学研究費補助金の交付を受けて行うからには、失敗は許されない。遺跡状況の不明な石虎山に賭けるのをもう一年先にし、安全を優先して、遺構の存在が確実な王墓山上遺跡を発掘することとして協定書に署名をする。

夜は発掘協定の成立を祝して答礼の宴会。ほっとしたせいか一寸飲み過ぎ、帰りはなかなか車に乗らず、大貫氏に迷惑をかけてしまった。

6月13日(火) 快晴—北京へ—

7時の朝食はジュースのみ。7時20分ホテル発、飛行場へ向かう。田さんら見送り。

中国民航のB737-300機に乗り、8時37分離陸。劉副所長、郭素新さん同行。上昇する左下に岱海が見える。機内で、8月の調査に来るとき、荷物が多いなら、中型バスで北京空港まで出迎えてもよい、と願ってもない話がまとまる。9時20分北京空港着陸。劉・郭さんと14時30分国家文物局で待ち合わせを約束して、我々は車で宿舎の天橋賓館へ11時着く。考古研究所の袁靖さんと約束していた大貫さんにくっついて考古研究所へ行く。任式楠所長、袁靖さん、やがてやって来た徐天進さんらと懇談。任所長の計らいで、四川料理を御馳走になる。待ち合わせ時間まで、文物局の隣の文物出版社の売店で本を物色。

14時30分国家文物局へ。まだ北京に滞在していた塔拉副所長もあらわれ、国家文物局文物二処で、孟処長、楊林氏に面会。こちらは内蒙古文物考古研究所の劉・塔拉副所長、郭素新さん、それに大貫さんと私の5名で、我々と内蒙古文物考古研究所との国際共同研究の発掘許可申請を行う。共同研究の協定内容についてもこもごも説明した。文物局側は報告書の出版について、質問があった。先の遼寧省とはその点で、当初の詰めが甘く、中国側の報告書刊行が遅れていることについて事情説明をする。

これまでに2度の共同研究意向書の交換があり、そのうえにたつての発掘協定である

ため、文物局側も調査着手期日が迫っているが、許可は必ず間に合うようにする、との約束を頂き、調査準備はやっと完了した。文物局との懇親会は多忙のため中止となったので、局の前で解散。次は内蒙古で会おう、と握手を交わして別れる。北京飯店へ行き、大貫さんと二人で久しぶりの生ビールで祝杯をあげる。買い物や夕食のあと、19時ホテルへ。このホテルは日本資本のため、衛星でNHKが入る。発掘の事前準備が無事終了、ゆっくりと床に入る。夜中に雷雨。

6月14日(水)曇—帰国—

6時起床、7時30分朝食、琉璃廠へ本探し。あとホテルへ帰り、タクシーで北京空港へ。JL-786便に乗り、関西空港へ。18時着、大貫さんは羽田へ乗継ぐので空港出口で別れ、帰宅した。

注

- 1) 江上波夫、水野清一『内蒙古長城地帯』(東方考古学叢刊、乙種第一冊)1935年。
- 2) 秋山進午「中国東北地方の初期金属器文化の様相—考古資料、とくに青銅短剣を中心として—」『考古学雑誌』第53巻第4号、第54巻第1・4号、1968-69年。
- 3) 秋山進午「内蒙古高原の匈奴墓葬」『富山大学人文学部紀要』4、1980年。
- 4) 田広金「桃紅巴拉的匈奴墓葬」『考古学報』1976年1期。
- 5) a. 内蒙古博物館、内蒙古文物工作隊「内蒙古准格爾旗玉隆太匈奴墓」『考古』1977年2期。
b. 塔拉、梁京明「呼魯斯太匈奴墓」『文物』1980年7期。
c. 伊克昭盟文物工作站、内蒙古文物工作隊「西溝畔匈奴墓」『文物』1980年7期。
d. 田広金、郭素新「内蒙古阿魯柴登発現的匈奴遺物」『考古』1980年4期。
e. 蓋山林「内蒙古自治区准格爾旗速機溝出土一批銅器」『文物』1965年2期。
f. 鄭隆「大青山下発現一批銅器」『文物』1965年2期。
- 6) 田広金、郭素新『鄂爾多斯式青銅器』文物出版社 1986年。
- 7) a. 遼寧省昭烏達盟文物工作站、中国科学院考古研究所内蒙古工作隊「寧城県南山根的石榴墓」『考古学報』1973年2期。
b. 中国科学院考古研究所内蒙古工作隊「寧城南山根遺址発掘報告」『考古学報』1975年1期。
c. 中国科学院考古研究所内蒙古工作隊「赤峰葯王廟、夏家店遺址試掘報告」『考古学報』1974年1期。
d. 瀋陽故宮博物館、瀋陽市文物管理弁公室「瀋陽鄭家窪子の両座青銅時代墓葬」『考古学報』1975年1期。
e. 中国社会科学院考古研究所内蒙古工作隊「赤峰蜘蛛山遺址的発掘」『考古学報』1979年2期。
- 8) 林滢「中国東北系銅劍初論」『考古学報』1980年2期。
- 9) 靳楓毅「論中国東北地区含曲刃青銅短劍的文化遺存」上下『考古学報』1982年4期・1983年1期。
- 10) a. 秋山進午『東北アジアにおける文明の生成と発展過程の考古学的研究—平成2～4年度文部省科学研究費補助金(国際共同研究)研究報告書』大手前女子大学 1993年。

- b. 秋山進午, 郭大順『東北アジアの考古学研究—日中共同研究報告書』同朋舎出版 1995年。
- 11) このシンポジュームの発表レジュメは, 次の刊行物にまとめられている。
『中国古代北方民族考古文化国際学術研討会—B. C. 10C-A. D. 14C』上下, 内蒙古文物考古研究所 1992. 8. 11-18.
- 12) 内蒙古文物考古研究所「内蒙古朱開溝遺址」『考古学報』1988年3期。
- 13) 田広金・郭素新「鄂爾多斯式青銅器的淵源」『考古学報』1988年3期。
- 14) a. 郭治中, 包青川, 索秀芬「林西県白音長汗遺址発掘述要」『内蒙古東部区考古学文化研究文集』海洋出版社 1991年。
b. 内蒙古自治区文物考古研究所「内蒙古林西県白音長汗新石器時代遺址発掘簡報」『考古』1993年7期。
- 15) a. 秋山進午「紅山文化と先紅山文化—赤峰紅山考古, 其の—」『古史春秋』第5号, 朋友書店 1989年。
b. 秋山進午「阜新査海遺跡と遺跡博物館」(注10-b, 文献, 336-342頁所収)。
- 16) a. 内蒙古自治区文物工作隊「和林格爾県土城子試掘記要」『文物』1961年9期。
b. 内蒙古文物考古研究所「内蒙古和林格爾県土城子古城発掘報告」『考古学集刊』6, 1989年。
- 17) a. 内蒙古自治区博物館文物工作隊『和林格爾漢墓壁画』文物出版社 1978年。
b. 秋山進午「“踏燕奔馬”と甘肅省武威の漢墓をめぐる二, 三の問題」『MUSEUM』No. 137, 東京国立博物館 1979年。
- 18) 田広金「涼城県老虎山遺址1982-1983年発掘簡報」『内蒙古文物考古』第4期, 1986年。
- 19) 田広金「内蒙古中南部龍山時代文化遺存研究」『内蒙古中南部原始文化研究論集』海洋出版社 1991年。
- 20) 田広金「内蒙古長城地帯石城聚落址及相關諸問題」『紀念城子崖遺址発掘六十周年国際学術討論会文集』齊魯書社 1993年。
- 21) 園子溝遺跡は前出, 注19) 参照。

第2部 第1次中日共同内蒙古「岱海」周辺遺跡発掘調査

— 1995年（平成7） —

1. はじめに

第3次予備調査によって、国家文物局の発掘許可の内諾も得られ、これで、調査の手続はすべて完了した。帰国後早速、準備にかかる。遼寧省との測量調査の経験で、ある程度の準備は出来ているので、あとは発掘に必要なものを付け足せば良い。廣川さんのはからいで、泉屋博古館の倉庫の一隅をお借りして、機材を集結する。いざ、集めてみると、さすがにその分量は大変だ。ケント紙やグラフ用紙など、紙類だけでも大変な重さ。それに光波測距儀、レベルとその脚、ポール、スタッフ、大型の平板とアリゲードセットに加え、トータルステーション用のパソコン、プリンターなど。壊れにくいものは事前に送っておこう、と荷造りに一汗かいて郵便局から送る。細々した機材、消耗品は廣川さん、嗜好品類は小田木さんが分担して調達していただいた。

平成7年度のメンバーは、次の通りである。

[発掘調査班]

| | |
|--------|----------------|
| 秋山 進午 | 大手前女子大学文学部教授 |
| 大貫 静夫 | 東京大学文学部助教授 |
| 宮本 一夫 | 九州大学文学部助教授 |
| 廣川 守 | 泉屋博古館学芸員 |
| 小田木治太郎 | 天理大学付属天理参考館学芸員 |
| 岡村 秀典 | 京都大学人文科学研究所助教授 |

大貫氏は黒龍江調査に参加のため8月7日から合流。岡村氏は所用のため後半参加。新戦力として小田木氏が加わった。

[オールドス青銅器調査班]

| | |
|-------|------------------|
| 山本 忠尚 | 天理大学文学部教授 |
| 中野 徹 | 和泉市久保惣記念美術館館長 |
| 高浜 秀 | 東京国立博物館東洋課中国考古室長 |

高浜氏は先発隊として先にモンゴル、内蒙古、河北を回っていただいた。

[中国側隊員]

| | |
|------|----------------------|
| 田 広金 | 内蒙古文物考古研究所研究員学術委员会主任 |
| 郭 素新 | 内蒙古文物考古研究所副研究員 |
| 郭 治中 | 内蒙古文物考古研究所副研究員 |

楊 沢蒙 伊克昭盟文物站, 鄂爾多斯博物館館員

ほかに索秀芬さん, 測量調査に王仁旺, 田文涛氏らが協力された。

7月31日: 自分の荷物の他, 壊れては困る機械類を関西の3人が手分けして担ぎ, 難波南海ホテルへ集合。荷物の配分と最後の調査打合せを行う。宮本, 廣川, 小田木, 私の4人, 忘れていたものや, 買いそびれたものを探し, 準備に万全を期す。

8月1日(火) 晴, 北京は曇—長城の旅1日目—

7時のラピートで難波から関西空港へ。10時3分離陸, 私にとって15回目の中国訪問だが, 初めての発掘調査に向かう今回の旅はやはり特別である。荷物制限の緩いビジネス席をとった。12時北京首都空港着陸。出口には約束通り馮さんがいつもの笑顔で待っていて下さる。車は中国製の牡丹という中型25人乗り。運転手は2人交代, もう一人夏休み旅行の運転手さんの坊や。荷物を積み込み早速スタート。長城の旅が始まる。

最初の目的地はいうまでもなく八達嶺。13時42分首都空港から北京市内へ向かう高速道路に乗って, 一旦市内へ入る。三環路から精華東路へ入り, 北西へ。15時40分八達嶺に立つ。これからの旅は長城に沿って, 内蒙古の現場まで二泊三日の予定である。

長城は北方からの遊牧民の侵入を防ぐため, 戦国時代の昔から営々と築き, 守られてきた。長城はしたがって, 定着農耕民と遊牧牧畜民とを区切る, 人工の境界線である。

私たちの国際学術研究のテーマは“遊牧騎馬民族文化の成立と発展過程の考古学的研究”とした。そのフィールドとして選んだ内蒙古涼城県の岱海は, 発掘現場のすぐ上を, 放棄された明代の旧長城遺跡が横切っている。その“農業牧畜接触地帯”の調査に出発する。

16時20分八達嶺を出発し, そのまま北上して延慶を目指す。延慶には北京市文物研究所が設立した「山戎墓葬陳列館」がある。前の遼寧省との共同研究の際, この遺跡の発掘を担当した北京市文物研究所の靳楓毅氏に案内していただき, 1990年に訪れたことがあるだけで, 延慶の町で博物館の場所を聞くがなかなかわからない。あきらめて, 張家口への国道を走り出したところ, 右手に見える山並みにどうも見覚えがある。まえに来た宮本・廣川さんと3人で, 確かこのあたりだ, と目をこらしている内に, 宮本さんが道路の上にてている博物館への案内標識を見つけた。車を引き返して右手の山の麓まで進む。山は墓地のある軍都山だ。17時15分博物館到着, しかし5時を過ぎているので, 入れないのではないかと心配しながら門に向かうと, 丁度, 鍵をかけて帰りかけていた管理人に出会い, 好意で参観をさせて頂けることとなった(図-1)。

この遺跡は, 1985-88年に500基以上の墓が発掘され, 概要が『文物』と『北京考古四十年』に報告されている。山戎とは¹⁾『史記』匈奴伝にある, 春秋戦国の際, 燕の北にあ



図-1 山戎墓葬陳列館

って強勢であった遊牧部族の一つである。博物館は発掘された墓群の一部に屋根をかけた遺跡博物館となっていて、興味深い。

17時50分博物館発、今夜の宿泊地の張家口を目指す。18時50分懐来、20時宣化、21時ようやく張家口到着。張家口市迎賓館に宿をとるが、到着時間が遅く食堂が閉まっている。町の中を車で回り、仕舞いかけていた食堂に交渉して遅い夕食。23時過ぎやっと就寝。

8月2日（水）雨後晴—長城の旅2日目—

張家口は北京の北の要衝として、開放されるのが遅かった。そのせいか、あまり高層建物が目に立たず、心無しかひっそりしているようである。市内に博物館があるはずだが、今回は先を急いで割愛する。8時25分ホテル発、今日の行程は本学学長日比野先生と小野勝年先生によって戦前に調査され、最近報告書が刊行された山西省陽高漢墓²⁾の現状を見たあと、大同まで行く予定。行程は180km。洋河を遡る国道110号線を、しとしと降る雨の中を走る。10時15分柴溝堡で舗装がと切れ地道となる。雨に道がぬかるんでスピードが上がらない。一寸急な坂道は登るのがなかなか大変である。対向車に石炭を満載したトラックがひっきりなしに通る。大同周辺の良質の石炭を、冬の暖房用に都会へ運ぶ。そうしたトラックでは、急な坂は滑って登れない。そこはそれで、坂下に牽引車

が待っていて、金を払うと引っ張ってくれる。聞くと一回100元からするとのこと。高い牽引料だが、それを払っても引き合う石炭輸送ということか。11時45分懷安通過、旧城壁が一部残っている。13時50分陽高着。やっと雨があがる。駅前の食堂で昼食。最近北京から帰って開業したばかり、ということで、なかなか美味しかった。

14時50分陽高から南へ向かう。途中の坂道がぬかるんで、前のトラックが上がれず、1時間近く立ち往生となる。峠からは桑乾河の流域平原の拡がるのが見晴らせる。坂道を下り切る前から、道路の右手に漢墓が見え始める。直径30~40m、高さ3~4mの円形である。やがて、古城堡につく。日比野先生らの報告書では、この村の周囲で発掘調査されたようであるが、報告書の地図と比べても、その位置が今一つはっきりしない(図-2)。諦めて村を出ようとするが、今度は我々の車が滑って進めない。やむなく別の道を探して引き返す。途中まで道案内をするから同乗させて欲しい、という女性の案内で、18時20分やっと国道へたどり着く。舗装道路にやっと出た。大同まであと40kmの標識付近では、ここにも右手に7~8基、やはり漢墓群が見えた。こちらは、先の陽高のものより大型である。19時30分大同の東門に入る。予定のホテルが思わしくなく、20時20分大同賓館へ変更して宿泊。



図-2 陽高古城堡漢墓群

8月3日(木) 快晴 — 長城の旅3日目 —

8時20分ホテル発、雲岡石窟へ向かう。白状するが、実は雲岡へは今回が初めてである。大同から西へ16km、武州河を遡ると並木の間から、右手の断崖に東方石窟が遠望される。8時50分石窟着。たった半日の駆け足参観ではあるが、天気にも恵まれ、石窟の素晴らしさを満喫することが出来た。12時見学終了、門前の食堂で山西名物の刀削麵の昼食。12時57分雲岡発、そのまま西へ進む。雲岡の西には大炭田がある。ここから、列車だけでなくトラックが石炭を満載して、西へ東へひっきりなしに輸送する。そのお陰で道路から近い雲岡石窟がトラックの地響きで影響がある、という記事を中国文物報が掲載していたのを思い出した。やがて左雲、ここから更に西へ進むと、右玉から殺虎口で長城線を越えて内蒙古のホリソグールへ出る。その途中に有名なホリソグール漢墓がある³⁾。我々は14時50分左雲の先で右、つまり北へ折れ、内蒙古涼城県へでる道をとる。雲岡を流れる武州河へ向かって段々と下ってゆく。三台子の先少しで、その河を渡る。道は今度は徐々に登りとなる。右手前方の稜線上に長城が見えてくる。ここからはこの長城を右に左に縫うように進む。右手にかなりの規模の城壁を四方に巡らした集落がある。長城線に近く、あるいはその頃からの城壁であろう。登り切った峠は山西省と内蒙古との境界線で、そこで長城を乗り越す。振り返ると今通ってきた武州河の向こうに、左雲が小さく見える。

ここから、道は長城線と並んでいる。日干し煉瓦を積み上げただけの長城は、ぼろぼろと壊れたままだ。要所要所の山の上には烽火台が次々と並んで聳える。内蒙古の山並みを徐々に下ると、はるか遠くに岱海が見えた。岱海の南岸の山にも烽火台が連なっているのが望まれる。目指す遺跡はどの位置か、烽火台の列を見下ろしながら、ひとしきり写真をとったあとは、車はどんどん岱海目指して下る。坂を下り切るとそこは岱海の南西岸だ。右へ南岸を進むと発掘地点となる。ここからは予備調査で二度通った道を涼城へさらに永興へととり、18時15分目的の老虎山工作站へ到着、門には田先生らがにこやかに出迎えて下さった。

さっそく、これから1か月を過ごす各自の部屋割り。私は中央左寄りに立つ母屋の一角を与えられる。この建物は我々を迎えるため、大改造が施され、右手に田夫妻室、左手が私の部屋で、中央には水洗便所とシャワー室が三つ新たに設けられた。風呂はなくともシャワーがあれば充分である。皆さんには母屋の左から後ろへ、鉤の手に曲がる建物のうち、日当たりの良い南向きの部屋が各自1室与えられた。外国で初めて1か月もの長期間の滞在となるため、あらかじめ個室をお願いしたが、その通りにしていただけた。郭さんのはからいで、部屋部屋には布団やシーツはもとより、花柄のカーテン、細々とした生活用品や嗜好品まで、きちんと用意されていて、その暖かい心使いに、ここでのこれからの生活の快適さが予想できる。19時30分夕食、食事はわざわざ、フホトカ

ら料理人が呼ばれて常駐し、調理してくれる。こちらも期待できそうである。あと、明日の予定を相談し、部屋で荷物を解き、就寝する。

8月4日（金）快晴—発掘1日目—

前夜は夜中に激しい雨音がしたが、快晴の朝を迎えた。しかし、その雨による道の修理もあって、午前中は発掘予定の打合せのみ。あと、あらかじめ送っておいた機材や用紙類を開梱、整理し、調査の用意をする。昼食休憩のあと、13時20分出発、いろいろ手違いが生じ、15時30分に現地到着。事前調査のときは歩いて登ったが、今回は車のまま頂上へ登れるよう道が整備されている。そこには大きなテントとモンゴールパオが張られ、そこが、調査基地となっている。早速、斜面を少し下がった現場で打合せ、以前の試掘や、事前のボーリング調査の結果をふまえ、現代の墓を避け、調査区域を設定する。今回の調査では500m²発掘の予定で、日本隊は1/3を受け持つこととする。何しろこの土について慣れることから始める必要があるからである。その上方の、遺跡範囲の外に基準杭を設ける。距離は100m、南をNo.1、北をNo.2とし、さっそくコンクリートで標識を埋め込む。真鍮製の径5cmの円盤に、中心の十字のほか、中日共同研究、1995年それにナンバーが彫り込んである。今回の発掘中に、来年発掘予定の石虎山の測量も予定しているので、No.2の基準杭は石虎山を見通せる位置とした。あと発掘前の写真を撮り、17時作業終了、17時20分現地発、涼城県の公安局に出向く。旅券を提示し、書類に記入するが、全員いま北京大学へ留学中の副教授ということになってしまった。そのせいか、あまり手間取らずに済む。外国人がホテルなどの施設以外に宿泊するからである。19時宿舎へ帰着。20時夕食。夜、雨。

8月5日（土）曇時々小雨—発掘2日目—

明け方からの雷雲が残っている。7時朝食、7時55分出発。9時38分現地着。9時40分作業開始、昨日設定した基準杭はきちんと完成していた。宮本さんと私は発掘調査部分の平板測量のため杭打ちをし、早速発掘部分の測量をはじめ。1/200。廣川、小田木さんは光波測距儀をつかって、全域のトラバース測量。雨のため早くかえることとなり、充分作業が出来なかった。14時45分現地発、16時30分帰着、19時夕食のとき、フホトからやってきた、測量が専門の王さんにあう。食後、田さんらと今年の調査考察日程の協議。2班編成としたため人の出入りが激しく、応接する方も大変である。

8月6日（日）曇後晴—発掘3日目—

昨夜も夜中雨、明け方には上がったが雲行きは良くない。7時30分朝食、8時に出発の予定で準備を整えたところ、谷川沿いの道路が壊れていて出発延期。収蔵庫で関係遣

物の実測や、借りた地図を写したりする。11時30分早い昼食、12時10分出発し、13時40分現地着。平板・光波とも測量開始してまもなく、15時すぎ夕立がくる。あまり作業が進まない。雨止まず、15時30分現地発、17時10分帰着。廣川さんは疲れから発熱し、夕食抜きで寝台に横たわる。夜、停電する。さっそく、蠟燭が配られるが、平素明るさに慣れ切っていて仕事にならない。

8月7日（月）快晴—発掘4日目—

8時40分発、9時15分現地着。午前、小田木さんはトラバース完成。杭の高さを測定して書き込む。宮本氏と私は平板にて調査区周辺の測量。廣川氏は休養。午後、小田木氏と私で平板により周辺測量続行。宮本氏が日本隊トレンチの発掘状況を見る。昼食中から夕立がくる。14時45分晴れ間が見え、15時作業再開。16時ごろ、わあっと歓声が上がったのは南を流れる歩量河に、上流から濁流が津波のように押し寄せてきたからだ。17時作業終了。17時20分現地を発ち、歩量河を渡ろうとするが、さっきの増水で渡渉出来ない。やむなく、岱海を東周りで帰ることとなる。岱海の東端を初めて見られると、かえって楽しみに走る。湖岸の眺めは、格段に良い。東端の町、麦胡図をすぎ、しばらく行くと大渋滞。昼の夕立で橋が流されてしまったのである。我勝ちの喧騒の中、30分かかってやっと通過。北周りは走行距離77kmと20kmは多い。20時やっと帰着。予定通り大貫さんが到着していて迎えてくれた。停電中であつたが、20時30分やっと電気がき、20時40分夕食となる。夜、紅台坡の遺物調査。

8月8日（火）快晴—発掘5日目—

7時37分発、歩量河の岸が崩落していて車が渡れず、皆で道を作る。9時25分やっと現地到着。9時30分～17時作業。午前は石虎山I・II地点を踏査して、今後の計画を協議する。ボーリング調査の強化と、それにもとづく試掘を相談する。午後、新たに購入した中国製平板が届いたので、今日から中国側と日本側の2台の平板により測量を行う。大貫・小田木氏は日本側平板にて測量続行。宮本氏は日本隊担当のT10、T16、T22の発掘監督。私は王・楊さんらと中国側の平板に同行。はじめ、なかなか平板が立たない。やっと原因は杭の位置の写し損ないと判明する。基準点2からコンター4本が入ったところで17時作業終了。夕食後は全員で収蔵庫の遺物観察を行う。

8月9日（水）快晴—発掘6日目—

7時45分発、9時10分現場着。午前中はまあまあだったが午後は暑気が厳しかった。9時20分～17時作業。午前、引き続き中国側平板に同行、上部東斜面測量。午後は同西斜面の測量。もうまかせて安心なので、午後後半は一部記録写真をとる。宮本氏は発掘

をみる。T10・T22の両トレンチで第3層、すなわち文化層の上面を検出した。17時25分発、18時45分帰着。

8月10日（木）薄晴—発掘7日目—

7時40分発、9時10分着。9時15分～17時作業。私は中国側測量隊に同行、杭3から北方部完成。大貫・小田木・索さんは西斜面下方測量完成。以上で遺跡周辺地形測量完成する。宮本さんが発掘状況を見る。我々の担当したT22トレンチでは、最も早く住居址を確認し、7号住居址（6号までは試掘調査で発見済み）としたが、中国側担当部分からも住居址らしい掘り込みに、土器が多量に埋蔵された部分を検出中である。T16でも第3層の文化層上面を検出する。T10では第3層上面に犁耕の痕跡が一面に広がっている様子を検出する。この犁耕の畦に切られる形で住居址F9の炉や居住面が認められるが、その範囲は不明である。炉の直径は70cmほどである。

17時15分発、途中、西瓜の見張り小屋の写真を写し、18時50分帰着。

8月11日（金）曇—発掘8日目—

昨夜の雨は上がったが、一日曇で涼しい。朝、道路の状況調査で出発延期し、8時25分発、10時15分着。10時15分～16時30分作業。午前、大貫さん王さんそれに作業員さんと石虎山I・II地点に基準点を埋設し、測定の準備をする。発掘中の王墓山の基準杭2から石虎山Iまで、約500m、石虎山IからIIまではさらに200mほど。午後、大貫・宮本氏はT22のF7住居址を掘り下げ、南と西壁確認。四分法による畦を設定し、掘り下げる。南壁は一部が強く焼けている。北側は床が段になっているらしい。廣川・小田木氏はトレンチ全域に実測用のポイントを作成。T10ではF9を検出し、写真撮影。17時45分発、19時15分帰着。

8月12日（土）薄晴—発掘9日目—

7時45分発、9時10分着、9時15分～17時作業。T22のF7住居址では西北部に門道を掘り出す。門道と家屋入り口の境に鉄製犁先が出土する。F7は新しい、少なくとも明代以降となった。小田木君はT10F9の平面図作成。午後からトータルステーションで遺物の取上げ。あと、トレンチ断面の写真、実測。T22の東壁は小田木君実測。17時30分発、19時帰着。

8月13日（日）夜明け前雨後晴—発掘10日目—

8時35分発、10時着。10時～16時50分作業。午前、1/100で、トレンチ内の遺構配置平面図作成。午後は田文濤君に手伝いを頼み、15時まで発掘現地の遠景写真を撮影する（図



図-3 王墓山遺跡遠景 (写真右の山が王墓山, 遺跡は中腹, 左は石虎山)

—3)。T22 F7住居址は全貌を明らかにさせるため、南の畦外しと東へ1mトレンチ拡張を行う。新たにT16の北にT17トレンチ、T10の北にT11トレンチの拡張を始める。16時40分夕立が近付き、17時発、19時帰着。

8月14日(月)晴—発掘11日目—

7時35分発、9時5分着。9時5分～17時作業。午前、地元の環境保護局から立ち木伐採の保証金の徴収に来る。併せてゴミなど環境を汚さぬよう注意される。日本側T17トレンチからF11住居址が顔を出す。同様に北へ拡張したT11トレンチからF12住居址を発掘するが、こちらは残りが非常に悪いようである。大貫・廣川氏は測量。小田木氏はT16の平面図ほか作成。17時25分発、19時帰着。

8月15日(火)薄晴—発掘12日目—

7時40分発、途中、かねて気になっていた西瓜見張り小屋を詳しく見ようと車を止める。なかを覗いたところ、余りにも発掘中の7号住居址とそっくりなので驚いてしまう。というのも、半地下式、片流れ屋根の中にちゃんと炕(=オンドル)が設けてあって、焚き口の上にはおなべがおいてある。炕のけむ出しは後側である(図-4・5)。簡単な見張り小屋の構造があまりにも発掘中の住居址と近似することに驚嘆しながら9時45分



図—4 岱海南岸西瓜見張小屋外観



図—5 西瓜見張小屋内部（炕を測る大貫氏）

現場着。9時45分～15時30分作業。午前、廣川・王さんと石虎山設置の基点のレベルを入れる。これであとは石虎山の地形測量は、中国側が単独で平板測量にかかることとなる。午前、F7の畦断面を作成し、畦を外す。下から紡錘車である牛の足の骨がでる。午後一杯かかり、F7をほぼ完掘した。正午、文物考古研究所の劉副所長、文化庁の蘇処長らが現地視察に訪れる。彼らは日帰りの予定。そのため、現場を15時45分引き上げ、17時5分帰着。また停電、蠟燭をともして宴会となる。

8月16日（水）終日雨—発掘13日目—

昨夜半から雨激しく、一日中降り続く。内蒙古は8月上旬まで雨期だとは聞いていたが、こんなに降るとは思いもしなかった。それに寒い。長袖はあまり持ってこなかったので、閉口する。午前は思い思いの作業に従事、あと、集まって作業の打合せ。それをもとに15時から田・郭さんと話し合う。要点は、1) 遺跡全体測量図面に正しい位置をいれたいため、試掘のあと埋め戻されている住居址の掘り起こし。2) 下方にあるという貯蔵穴の一部を調査したい。3) 測量図はそれぞれ作成した側がトレースして提供する。4) 王墓山出土遺物のうち、別置されているものを観察したい。5) これまでの試掘調査の際の図面類を提供して欲しい。これらはすべて、快く聞き入れていただき、順次提供された。あわせて来年、田氏らの来日時の見学希望項目や、さらに来年度の発掘計画まで話が弾んだ。

8月17日（木）曇時々晴—発掘14日目—

雨は上がったが、長雨のため道路が崩壊して身動きが出来ない。昨日の申し入れによって早速提供された遺物の写真撮影や、既往の調査の際の図面類をトレースして一日過ごす。やっと停電が復旧する。午前、退職した中央幹部が里帰りしたついでに、我々のことをきいて宿舎に見学にこられる。昼食時にはそのあと残った地元文化局の毛さんらと宴会。皆は昼食休憩のあと、15時から老虎山遺跡の見学に赴く。夕食後は提供された王墓山下遺跡の原図を手分けしてトレースする。

8月18日（金）曇—発掘15日目—

7時35分、中二日おいてやっと出発、9時現地着。9時～17時作業。現場は曇で風が寒い。風邪をひかぬよう防風衣に身を固める。17日のうちに、作業員さんだけで、お願いしていた畦が外されていた。午前、中国側担当のT9のH5でフロテーション・プラントオパール・花粉分析用の土壌サンプル採取。午後、F7を清掃し、写真撮影。

8月19日（土）快晴—発掘16日目—

7時35分発，8時55分着，作業は9時から17時迄。快晴が戻ってきたが，今度は地面にしみこんだ水分の蒸発で蒸し暑く，皆大いに疲れる。T17のF11を検出し，写真撮影。今次の発掘以前，中国側が発掘した住居址の再発掘が終り，光波測距儀にて測量した。これで，すべての住居址の配置図を作成できる。午後，F11を四分法によって掘り始める。出土遺物はその都度，トータルステーションに取り込む。

昼食のとき，作業員の娘さんが，15日に発見したF7住居址の牛の足の骨と全く同じものを持ってきてくれた。名前はパーリャオ（扒吊）といい，今も，麻に撚りをかけるとき使うそうである。ただ，F7出土のものとは異なるのは，真ん中に穴をあけ，丈夫な針金を通し，吊り下げるのに便利ないようにしてある点である。それにしても，住居構造が現在の西瓜見張り小屋と同じであることといい，使用の道具が現役であることといい，驚くことが多い。この道具は我々に寄贈していただいたので，天理参考館の民族資料とすることとする。

8月20日（日）快晴—発掘17日目—

7時35分発，9時着。9時～17時作業。午前，F11の掘り下げを進める。新たに拡張したT23から住居址F17検出する。宮本さんが監督にあたる。昼休みを利用して，発掘



図—6 旧長城遺跡（遠景は岱海）

地点の上部斜面に横たわる旧長城の見学に行く(図-6)。そばへ行くとさすがに大きいものである。私は長城というものは一本線だと思っていたが、この岱海の南岸には放棄された長城の城壁と、その上の山頂の烽火台が延々と連なっている。維持管理や遊牧民との勢力圏のためであろうが、こんな巨大な労力を要するものを、作ったり放棄したりするものである。午後は5m枠の畦を外すため、それぞれの部位のセクション作成。17時35分発、19時帰着。

8月21日(月)薄晴—発掘18日目—

7時35分発、8時55分着、9時~17時作業。宮本氏と廣川氏がF17発掘、大貫氏がF7実測にかかっているため、小田木君と共に、私も終日11号住居址の発掘に取り組む。F17を完掘するため、トレンチを北へ2m延長する。夕方まで作業し17時25分発、18時55分帰着。夜、また停電。自家発電は故障がちであり役に立たない。蠟燭では仕事にならず、皆、星空で雑談し、あとは早寝。

8月22日(火)曇後雨—発掘19日目—

7時45分発、9時10分着、9時10分~12時作業。午前、11号住居址の調査続行。石鏃、石斧、土器片検出。東西に連なる炉あとの形状も判明してきた。F17も四分法により掘り下げ始める。中国側が主に担当したF10住居址を正確に実測したいということで、1mメッシュを張り、小田木君が実測開始。昼食後の休憩中、雷雨くる。帰り道が通れなくなることを恐れて14時58分引き上げる。老虎山付近も激しい雨で、道路がぬかるみ、山荘を目の前にして、車がスリップし、登ることが出来ない。やむなく、豪雨のなかを皆濡れ鼠で歩いて山荘につく。夜、小田木君の誕生祝い。本当は9月1日なのであるが、彼は8月末に先に帰国するので、郭さんの配慮で繰り上げて祝うこととなった。食堂には彩り豊かなテーブルが張られ、フホホトで調達した直径50cm、2段重ねの大きなケーキが飾られる。予想もしていなかった中国側の厚意に、小田木君は大感激。停電の中、皆で楽しい夜を過ごした。

8月23日(水)快晴—発掘20日目—

昨夜の激しい雨で、麓の小川が増水し、車が渡れず、午前中は待機する。その間に、王墓山下遺跡の図面のトレースを行う。12時8分発、13時30分現場着。13時30分~17時30分作業。F11、F17とも発掘続行。発掘区外西北の5号住居址は再発掘の結果、住居址ではなくピットと判明。これは中国側の位置の把握に誤りがあったため、実は別の場所であった。深く掘り下げていた墓が完掘され、2号墓からは瓦に朱書きされた墓誌が見つかる。なんと、清代末の道光年のものであった。そうすると、我々が調査してい

た7号住居址や、その前面に広がっていた畑の犁あとも、その頃のものということになる。上方に残る旧長城と関連付けていたのは誤りであったらしい。大貫氏はその7号住居址の実測完了。断ち割りで炕の様子も良くわかった。小田木君は10号住居址実測。宮本・廣川氏は17号住居址の発掘と、出土遺物をトータルステーションへ登録作業続行。中国側が進めていた石虎山の測量は今日、I地点が完了し、II地点へ移る。11号住居址で昨日出土した石鏃がない。私が騒いでいたら作業員のおばさんが一人、掘り上げた排土の山を篩にかけ、2時間ほどで捜し出してくれた。反省と共に、その根気に驚く。18時発、19時25分帰着。今夜も停電中であったが20時30分復旧しやれやれ。こんなに停電があるとは思わず、光波用の充電に気をもむこと。

8月24日（木）晴—発掘21日目—

7時40分発、9時10分着。9時10分～17時作業。宮本、廣川氏は17号住居址の発掘と出土遺物をトータルステーションへの取り込み続行。F17の床面がでてきた。大貫氏は8・11号住居址の花粉分析用サンプル採取。小田木氏は10号住居址の実測。中国側の発掘も進み、F13、F16、F18が完掘され、皆で写真撮影する。我々のように掘り下げ途中の出土遺物を一々トータルステーションに入れなくても早さが随分違う。F17はさらに東へ1mトレンチを拡張する。また門道部も掘り始める。17時30分発18時55分帰着。今夜も停電、夕食後、真っ暗な中庭で星空を見上げる。久しぶりの満天の星を眺める。銀河が真上にかかっている。

8月25日（金）快晴—発掘22日目—

7時57分発、9時25分着。9時30分～17時15分作業。大貫氏は11号住居址の発掘。小田木氏は午前、10号住居址のセクションをとる。午後は11号住居址の西北隅にある貯蔵穴の掘り下げ。なかから土器が出てくる。小口鼓腹双耳罐で、完形品らしい。宮本、廣川氏は引き続き17号住居址の発掘。東の壁面に達する。F17住居址北東部に逆さまとなっている小口鼓腹双耳罐をとりあげる。上方から落ち込んだ模様である。17時30分発、19時10分帰着。今夜は停電がない。索さんの誕生日で小田木君のとき同様、飾とケーキで祝う。

8月26日（土）曇—発掘23日目—

昨夜雨が降り、上がったが雲が低く垂れ込め、今にも降りだしそうである。風が肌に冷たい。現地作業をあきらめ、近くの遺跡見学を行うこととする。8時7分発徒歩で黄土台地を上り下りしながらオールドス青銅器時代の墓群で有名な毛慶溝へ向かう。8時40分着。蛮汗山から延びる尾根の上に位置するが、おもっていたより山峰に近い。かつて



図-7 毛慶溝遺跡遠望（西から）



図-8 毛慶溝遺跡（北の尾根から見下す）

の発掘のまま累々と墓坑が並んでいる⁴⁾(図一7・8)。9時25分見学を終え帰途につき、10時山荘へ帰る。昼迄トレースや地図を写したり、写真を撮ったりする。

午後、少し天気も回復気味なので龍山文化期の城跡である板城遺跡へ行こうということで、14時10分発、一旦舗装道路へ出、東へ進み、すぐまた左の蛮汗山方向へ進む、河沿いに道を取り板城の集落へはいる。14時30分歩き始める。この村はもと窯洞住まいであったが、近年、窯洞から出て下方に平地住居を営むようになった。したがって村を抜けて上に登ると放棄された窯洞がまるで遺跡のように立ち現れる。この村のさらに上に遺跡がある。遺跡地は木が一本もなく見晴らしは良好である。北と西の城壁はなかなか残りが良い。尾根に沿ってその両者が頂上辺で一つになる(図一9)。下方の城壁は上から見たところでは良くわからない。内部は下方の斜面が緩いところに住居址があるらしく、そのうち、すでに田さんらによって、夏時代の住居址や、龍山時代の住居址と窯あ⁵⁾となどが試掘されている。

頂上に連なる尾根をさらに登ると、そこに田の字形に石塊を並べた遺構が5基、尾根沿いにある。田さんは龍山時代の祭祀遺構ではないかというが、付近は漢代の古長城線に近く、漢式土器の破片もあり、漢代のものではなかろうか。16時30分下山の途中、放棄された窯洞の崖面に漢代の墓が暴露しているのを見つけた。青銅や鉄の武器が露出していた。



図一9 板城遺跡(北から)

迎いの車を待つ間に付近の農家に入る。窯洞から出て平地に住居を作ったものの、その住居はなお、かつての形を踏襲しているところが面白い。屋根はまっ平である。南の窓の下に炕があるところは発掘した7号住居址や西瓜見張り小屋と共通している。

村の中央、広場に面して、もとは廟があったそうであるがいまはない。それにむかってたてられた清代の舞台が今も残っている。富山大学時代の同僚の磯辺夫妻が、こうした戯曲上演用の舞台を踏査していたことを思いだし、写真をとって送ってあげることとする。17時板城村発、17時20分帰着。

8月27日（日）快晴—発掘24日目—

7時35分発、1日おいてやっと現地へ向かう。9時10分着。9時10分～16時作業。こちら昨日は雨だったとのこと。午前、F17は畦を外す。F11は北西隅の貯蔵穴がどんどん広がってなかなか掘り上がらない。昼食後、発掘参加全員の記念撮影をする。15時タクシーで到着した田さんの次男文理君が、母の死を知らせる。今年は危ない予感があったが、実際聞かされるとじんとなる。後事を諸兄に託して、終盤の現場をあとにする。

私はこのあと一旦帰国し、母の葬儀をおえ、再入国手続きをすませ、もう一度フホトへは9月5日に帰った。この間の発掘の状況は以下、宮本氏の調査日誌から引用させていただく。

8月28日（月）晴後曇—発掘25日目—

9時～17時30分作業。午前、F17は壁面、柱穴の検出と掘上げ。居住面が張り替えられ、2層になっていることが判明する。F11、F12が掘り上がり、写真撮影を行う。午後、中国側発掘のF8、F5の写真撮影。F17の門道部には石が階段状におかれていた。またその下方に床面があり、別の住居址の可能性もある。

8月29日（火）晴時々曇—発掘26日目—

9時～17時30分作業。午前、F17の門道部を掘り上げ、全景写真をとる。中国側F14の写真とりなおし。また、F16を切る、とされたF18はF16と同一と判断され、住居址番号は消滅された。午後、F17の平面実測完了。F7の東壁で検出されていた居住面は新たな住居址であることが確認された（F20）。

8月30日（水）晴—発掘27日目—

10時～17時作業。午前、昨日確認されたF7東壁の住居址F20に続き、その北、F17とのあいだにもう一つ住居址F21発見。炉の位置からも、F21がF20を切っていることが判明する。F17の門道の前には活動面があり、その活動面がF20を切っているのでF

20はF17より古いこととなる。F17の断面図を作成する。午後、F17の門道の南にH22、その西にH23の貯蔵穴を検出し、発掘する。16時、今回の発掘区の発掘が一応完了したことで、全景写真の撮影を行う。500m²の発掘区の中に、住居址だけでも15基発掘されただけに、壯観である。

8月31日(木)曇後雨—発掘28日目—

9時～10時作業。H23の掘上げ完了。全体写真の取り直し中、雨が降りだし、作業中止。

9月1日(金)雨—発掘29日目—

雨のため、作業できず。

9月2日(土)曇時々小雨—発掘30日目—

9時30分～17時30分作業。午前、F17の断ち割り開始。F20・21、H20・21の写真撮影と実測用割り付け。午後、以上の平面図の作成とレベル記入。F17は断ち割りによって、3面の床面が確認された。上2面は床面の張り替えによるものであるが、その下に焼いた面があった。これは、床を張る前に焼いて固めたものである。その下に埋土があり、更にその下にもう1面床面があって、これに対応する炉は上2面の床面に対応する炉とは位置がずれている。

9月3日(日)小雨後曇—発掘31日目—

9時30分～17時作業。午前、F17断ち割り部分の写真撮影。断面図作成。これにより、F17は1次と2・3次に分けられることが確認できた。また、1次と2・3次では炉の位置だけでなく、柱穴の位置も異なり、2・3次では住居址が北側に拡張されたことが判明した。午後、T22・23東壁断面の写真と断面図作成。F20・21の断面写真と断面図作成。以上ですべての作業を完了した。

9月5日(火)快晴—再びフホトへ—

JL-785便、関西空港9時45分離陸、11時57分北京空港着陸。乗継ぎの航空券を貰うため、市内へ向かう。そのあと、歴史博物館で関係資料を撮影して過ごす。再び北京空港からCA-1134便にて、22時5分離陸、22時58分フホト着陸。郭さんが出迎えて下さり、昭君ホテルへ。第2班のオールドス青銅器調査班として、山本さんと一緒に先着していた中野さんが迎えて下さる。24時頃まで氏と懇談。

9月6日(水) 雨—フホト滞在一

7時30分朝食のとき、発掘隊とオルドス隊の全員が顔を揃える。9時から今後のスケジュールを打合せる。あと内蒙古博物館へ自由見学に行くが、写真を撮る撮らないで一悶着を起こす。劉副所長まで引っ張り出し、なんとか解決する。皆さんに申し訳ない。

午後は14時10分からフホト市博物館を見学する。フホト市に内蒙古博物館のほか、フホト市博物館が開設されていることは、今年になって初めて知った。この博物館は1991年に開館したばかりである。場所はフホト駅の北西にある。博物館の建物は、康熙帝の第六女恪靖公主が、蒙古族の喀爾喀部へ降嫁したときの公主府である。⁶⁾

丁度、慶陵東陵の壁画模写展を開催中であった。田村実造・小林行雄先生らが1939年発掘調査された慶陵は、特に東陵の壁画で名高い⁷⁾。その東陵が盗掘を受け、1992-94年、緊急発掘が行われ、あわせて壁画の模写が行われたとのことである。それによって、現存の壁画31幅、81m²がすべて臨摸された。その際、今回は未発掘であった墓道部分が全掘されたが、惜しいことに、雨のため、模写も写真もないまま、とのことである。墓室は田村先生らの発掘のあと、保存のため埋めておかれたが、現在はどのようになっているのであろうか。調査報告書と模写とを詳しく比べてみたいものである。

報告書のカラー写真などで、概略は心得ていたが、やはり実物大、全景の模写は、大きさにおいてだけでも迫力充分である。北京からベテランの画家を呼び寄せたというだけあって、墓室四壁に描かれた四季の風景は、素人の私が見ても見事に模写されているようにみえた。

9月7日(木) 小雨—フホト滞在一

8時30分文物考古研究所へゆき、来年度の協議を行う。時期等は今年と同じく、発掘は石虎山I地点を重点として行うことで合意する。昼は田さんのお宅で羊のしゃぶしゃぶを御馳走になる。午後は文物考古研究所にて毛慶溝の出土遺物を全員で調査する。夜はホテルにて焦副庁長出席の宴会。

9月8日(金) 雨—フホト滞在一

予定では包頭の遺跡見学であったが、雨のため中止、午前は文物考古研究所でオルドス青銅器の調査。午後は3階の特別陳列室を見学する。夜、主治医の花岡先生から紹介を受けた内蒙古医科大学教授アスゲン先生と面会、娘さんと3人で夕食をとる。

9月9日(土) 霧後晴—臨河へ—

今日から黄河を遡り、臨河、銀川に各1泊して寧夏回族自治区で発掘をしている菅谷氏らの現場を訪れ、併せて寧夏の北方式青銅器を調査しようという計画である。田先生

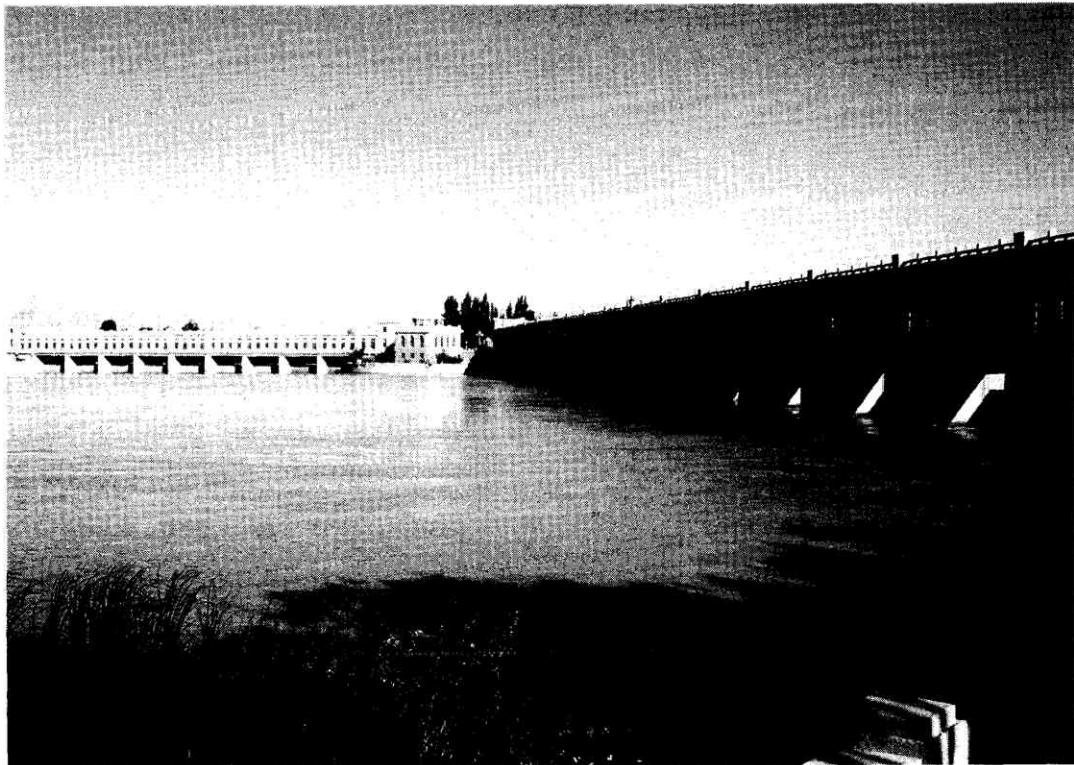
も同行して下さる。1か月以上の休暇がとれず、先に帰国した小田木君、それに公用のため途中で帰る中野氏を残し山本・大貫・岡村・宮本・廣川氏と私の6名。車は発掘調査の往き来に使った日産アーバン、運転は同じく魏さんである。8時30分ホテルを出発、西へ包頭を目指す。

午前の行程は180 km。朝霧は段々晴れ、やがて、右手、北側に陰山山脈の南端の大青山山脈が延々と険しい傾斜でせまる。包頭の新市街にある包頭賓館で昼食。12時45分出発。15時45分五原通過。北方遊牧民がオルドス平原に侵入するのは、この陰山山脈の切れ目である五原の北からである。道路はここから黄河の流れに沿って南へ向かう。17時臨河市。フホトからここまで433 kmを走った。

臨河市は巴彥淖爾盟の首都としての新しい町である。巴盟賓館に泊まる。今夜は中秋節、夜空に爆竹のはじける、けたたましい音がひっきりなしに響く。我々も窓を明け放ち、フホトで購入した月餅を食べながら名月を見上げた。

9月10日（日）快晴—銀川へ—

7時37分ホテル発、右手、西に今度は狼山山脈が遠くに連なる。8時35分欄河閘。黄河に閘門を設け、欄河へ水を分けている。閘門の橋を渡ったところに公園が設けてある。休憩して滔々と流れる黄河の写真を撮る。今まで何度も黄河を渡ったが、こんなに川岸



図—10 黄河の欄河閘

近くを通るのは初めてである。公園から黄河の岸に下りる。川幅は300mほどとそれほど広くないが、真黄色に濁り深さが計れない河水が、滔々と流れる様は不気味でもある。岸辺でも黄土が溜まり、水は黄色く濁っている。黄河の流れに手を浸けてみる。冷たい。そして浸けた手が見えない。これこそが黄河だ(図-10)。

8時45分出発、これから黄河の右岸、つまり東を走る。西側は狼山山脈を後ろに、その前一面、黄河の岸まで烏蘭布和砂漠が広がる。走る車窓から、黄金色に光る砂丘が延々と連なる様が、はるか遠くに見える。今走る黄河の東も、オルドス高原の西端で、こちらには庫布齊砂漠が広がる。黄河を東に渡ってから烏海市迄の間は、左右に砂漠が広がる荒寥とした世界である。

9時50分烏海市。ここで再び黄河を西へ渡り、内蒙古から寧夏へ入る。石嘴山市から、西の山は賀蘭山である。12時灯塔村の東に田州塔が見える。塔の天辺の形で、一見して西夏の塔とわかる。西夏王国の領域にやって来た。右手に銀川の北にある西夏の海宝塔を見ながら市内に入る。12時45分宿舎の寧豊賓館に到着。臨河から322km走った。出迎えてくれた寧夏文物所の女性の案内で、北門近くの草堂酒楼で昼食。15時寧夏博物館のある承天寺へ。門を入った左の2室が西夏文物陳列室、右手は寧夏歴史文物展示室。ここに目指す寧夏出土の北方系青銅器が一部展示されていた。中では1983年に中寧県関帝郷倪丁村発掘の青銅短劍墓出土品⁸⁾がかなりまとまって展示されており、参考となった。

中庭の正面には承天寺塔が聳える。八角十一重の磚塔で高さ64.5m、寧夏第一の高塔である。天辺の緑瑠璃磚で桃形とした宝頂が印象的である。また白塔とよばれる。もっとも当初の西夏のものは地震で倒壊し、現在のものは清代嘉慶二十五年(1820)の再建である。博物館参観のあと、文物商店を回りホテルへ。

9月11日(月)晴—銀川—

固原への出発は待つて欲しいということで、やむなく、予定外の西夏王陵の見学に行く。8時30分ホテルを出、西へ新市街を抜け、賀蘭山の麓近くまで行く。9時20分王陵着。広い!というのが第一感である。南の陵墓はかすんで定かではない。蟻の塔を大きくしたような陵墓が点々と聳えるほか一面の荒れ地には、草を求める山羊と羊の群れが、僅かに生き物の姿をとどめるのみである。我々は北の9号陵から南へ、3号陵を除く他の陵墓を一巡し(図-11)、12時15分ホテルへ帰った(西夏王陵の番号は『文物』の概報と、近年刊行された報告書⁹⁾とでは大幅にことなり、報告書の番号によった¹⁰⁾)。昼食のとき寧夏文物所の女性から、固原行きは許可できない。理由は一切いえない、と通告を受けた。全員で協議し、引き返す途中、包頭からオルドス高原の東勝市へ向かい、オルドス博物館を見学し、帰りに包頭へたちより、前に雨のため行けなかった、大青山南段の新石器時代遺跡の踏査をおこなうことに切り替えることとなった。山本さんは二度



図-11 西夏王陵

目の東勝行きで気の毒だが、やむを得ない。

田先生はなお、知り合いの寧夏文物考古研究所の許成所長を訪ね、打開策を尋ねたいとのことで、承天寺のなかの文物考古研究所を尋ねるが、やはり困難とのことで、明日、引き返すこととする。

9月12日（火）曇後晴—包頭へ—

8時10分寧豊賓館発、来た道を引き返す。10時8分寧夏から再び内蒙古へ入る。12時50分臨河のマンガレーホテルで昼食。18時50分包頭の天外天大酒店へ到着し宿泊する。

9月13日（水）晴—東勝市へ—

8時50分ホテル発、11時東勝市のオルドス博物館到着、王館長が迎えて下さる。宿舎の天驕大酒店で昼食の後、オルドス博物館を見学する。

9月14日（木）晴—東勝市—

7時55分ホテル発、東勝市から南下し、9時伊金霍洛旗文物保護管理所へ。ここはもとの郡王府の建物を利用している。陳列品はそれほど多くないが、なかでは布爾台格鄉明千木都出土の、オルドス青銅器資料が興味深かった。10時12分郡王府発、11時10分ホ

テル帰着。午後は15時から再び博物館へ行き、倉庫にある逸品を出していただく。それらは、伊金霍洛旗の東南朴連郷石灰溝で発見された銀器と青銅器で、報告では墓とされる¹¹⁾。夜は博物館職員が経営する餃子店で、王・楊さんらと痛飲する。

9月15日（金）晴—包頭・フホトへ—

7時45分ホテル発、王館長夫妻と朝食を共にする。お二人は蒙古族の王族にあたる。モンゴル風の朝食を頂く。8時30分発、包頭に向かうが、途中大渋滞にぶつかる。この道は東勝市付近から出る石炭を、包頭へ運ぶトラックの列が絶えない道路である。むこうで事故があったらしいが、詳しいことは分からない。回り道をしようと迂回路へ向かったが、河の深みにはまって動きがとれず、やむなく、トラクターを徴発して引っ張り上げてもらう。お陰で1時間以上時間を空費し、包頭の文物管理所の人との待ち合わせ場所までいったが誰もいない。

昼食のあと、田さんが調査をしたことのある、西園遺跡へ向かう。大青山の南段に突き出た台地の上に遺跡がある。台地の上に上がると眼下に黄河が見える。丁度東へ流れる黄河が90度向きを変えてここから南へ流れる地点である。西園遺跡は間を流れる溪流を挟んで東西二つの遺跡からなる。東は龍山時期¹²⁾の住居址群である。西は東半分が仰韶文化期の遺跡、西半分が春秋時代の墓地である¹³⁾。墓地部分は発掘したままの状態で見ら



図—12 内蒙古草原

れるよう覆い屋が掛けてあるが、内部はかなり傷んでいた。16時遺跡発、18時ホテル着。

9月16日（土）晴—草原へ—

今日は休養日。折角の蒙古だから今日は草原へ行こうと決した。9時30分ホテル発、フホトから北へ陰山山脈を分け入る。10時30分武川、11時5分召河着。フホトから81km。ここはフホトからもっとも近い草原である（図—12）。この草原に戦国の長城線があるというので見たが、草原の中をほんの僅か隆起した線が走るだけで、真偽のほどは確言し難い。

皆さんは馬に乗って草原を駆けていったが、田さんと私はパオの中で休息をきめこんだ。あと、観光客用に広場で行われた蒙古相撲を見た。観客の中で勇敢に挑戦する人がいたが、やはりかなわず、拍手を受けていた。

夜は今回の共同研究の締めくくりの宴を催す。趙副局長始め、今回の調査でお世話になった方々と和やかな一時を楽しんだ。

9月17日（日）晴—北京へ—

7時朝食のあと、ホテルを引き払い、空港へ向かう。劉副所長、田さん夫妻などから見送りを受け、中国民航に乗り込む。8時34分離陸、左の窓に岱海が見える。9時22分北京空港着陸。空港案内所で宮本さんが交渉し、民族飯店に泊まることとなる。11時ホテル着。昼食後、琉璃廠で本を探す。夕食は北京飯店。

9月18日（月）晴—北京滞在—

8時30分ホテルから北京飯店へゆき、本を送る。故宮へ行くが、月曜でほとんど開いていない。歴代文物陳列館で、並んでいた収集品のオルドス青銅器を全部撮影する。

昼食はホリデイ・イン。あと考古研究所付属の売店で本を探す。そのご、王府井で土産を買う。

9月19日（火）曇—北京滞在—

9時ホテル発、この夏、新しく開館した琉璃河西周燕国遺址博物館の見学に向かう。北京大学の徐天進さんが案内して下さる。高速道路を石家庄方面に向かい、竇店出口で下りる。ここから右へ行くと周口店洞窟へ、左へ行くと琉璃河遺跡へつく。10時着。城内を北京大学が発掘調査中である。劉緒氏ら顔見知り¹⁴⁾が発掘の指揮にあたっている。この発掘の成果は早速、今年の『文物』に発表された。

ついで博物館へ行く。応接室で趙福生北京市文物研究所副所長兼博物館長から博物館の概要を聞く。博物館は1995年8月21日に開館したばかりである。陳列面積3000m²、収

蔵面積2000m²あり、陳列は最新の展示方法をとると言うが、実際あとで展示室を見て驚いた。発掘したままの52・53号墓やその車馬坑の上に四方からハーフミラーを掛けてあるため、内部が浮き上がって見える。日本でも見たことがない展示方法である。燕国古城址は城址部分が董家林村、墓地部分が黄土坡村にかかっているが、今後1億元かけて立ち退かせ全体整備したいとのことであった。展示には燕国墓地から出土した青銅器は無論のことであるが、その他、我々が関心を持つ、北方系青銅器も昌平白浮西周墓¹⁵⁾や順義牛欄山¹⁶⁾の青銅器、それに劉家河の商代金腕輪と金耳栓¹⁷⁾なども展示してあり、参考となった。

15時30分見学を終え、北京市内の文物研究所へ向かい、出来たばかりの『琉璃河西周燕国墓地1973-1977』¹⁸⁾の報告書を購入した。

9月20日(水)曇—帰国—

9時早々に考古研究所を訪問し、任所長らに発掘成果を報告したあと、考古研究所の展示室を参観する。報告で有名な遺跡の出土品がぎっしり並んで壮観である。

その後、空港に向かい、JL-786便に搭乗。14時6分離陸、関西空港へは17時55分着陸、出口で解散し、今回の国際学術研究の任務を無事終了した。

平成7年度の国際学術研究が、予想以上の成果をおさめて無事終了できたのは、第1部、第2部に記したごとく、共同研究に参加された日中隊員諸氏の、絶大なご努力の賜であることを銘記し、厚く御礼申し上げる。

本稿はそうした各氏の研究状況を単に纏めたにすぎない。とりわけ、第2部に記した王墓山の発掘調査は、日中それぞれで報告を作成中であるため、各人の調査日誌の羅列にとどめ、図面や写真は一切省略した。

そしてまた、我々に絶好の舞台を提供していただき、共同研究推進にご努力いただいた内蒙古文物考古研究所の劉来学・塔拉・魏堅副所長はじめ内蒙古文物考古研究所員諸氏、上部機関の内蒙古文化庁趙芳志副庁長、中日共同発掘調査を認可頂いた国家文物局諸氏らに深甚の謝意を表す。

注

- 1) a. 北京市文物研究所山戎文化考古隊「北京延慶軍都山東周山戎部落墓地発掘紀略」『文物』1989年8期。
b. 北京市文物研究所『北京考古四十年』北京燕山出版社 1990年、第5章。
- 2) 小野勝年、日比野丈夫『陽高古城堡—中国山西省陽高県古城堡漢墓—』(東方考古学叢刊乙種第八冊)六興出版 1990年。
- 3) a. 内蒙古自治区博物館文物工作隊『和林格爾漢墓壁画』文物出版社 1978年。

- b. 秋山進午「“踏燕奔馬”と甘肅省武威の漢墓をめぐる二、三の問題」『MUSEUM』No.137, 東京国立博物館 1979年。
- 4) 田広金, 郭素新『鄂爾多斯式青銅器』文物出版社, 1986年。
- 5) 田広金「内蒙古中南部龍山時代文化遺存研究」『内蒙古中南部原始文化研究文集』海洋出版社 1991年, に簡単な論及がある。
- 6) ト揚武「呼和浩特博物館の五年」『内蒙古文物考古』1995年1・2期。
なお, この期は呼和浩特市博物館五周年記念専刊となっている。
- 7) a. 田村実造, 小林行雄『慶陵』京都大学文学部 1953年。
b. 田村実造『慶陵の壁画』同朋舎出版 1977年。
c. 田村実造『慶陵調査紀行』平凡社 1994年。
- 8) 寧夏回族自治区博物館考古隊「寧夏中寧県青銅短劍墓清理簡報」『考古』1987年9期。
- 9) 『文物』1978年8期の西夏陵墓特集号。韓兆民, 李志清「寧夏銀川西夏陵区調査簡報」『考古学集刊』5, 1987年は双方併記。
- 10) 寧夏文物考古研究所・許成・杜玉泳『西夏陵』東方出版社, 1995年。
- 11) 伊克昭盟文物工作站「伊金霍洛旗石灰溝発現的鄂爾多斯式文物」『内蒙古文物考古』1992年1・2期。
- 12) a. 包頭市文物管理所「内蒙古大青山西段新石器時代遺址」『考古』1986年6期。
b. 内蒙古社会科学院歴史研究所, 包頭市文物管理处「内蒙古包頭市西園遺址1985年の発掘」『考古学集刊』8, 1994年。
- 13) 内蒙古文物考古研究所, 包頭市文物管理处「包頭西園春秋墓地」『内蒙古文物考古』1991年1期。
- 14) 北京大学考古学系, 北京市文物研究所「1995年琉璃河周代居址発掘簡報」『文物』1996年6期。
- 15) 北京市文物管理处「北京地区的又一重要考古收穫—昌平白浮西周木槨墓的新啓示」『考古』1976年4期。
- 16) 程長新「北京市順義県牛欄山出土一組周初帶銘青銅器」『文物』1983年11期。
- 17) 北京市文物管理处「北京市平谷県発現商代墓葬」『文物』1977年11期。
- 18) 北京市文物研究所『琉璃河西周燕国墓地1973-1977』文物出版社 1995年。

本稿は平成7年度文部省科学研究費補助金（国際学術研究）による研究成果の一部である。